

# 仲原正治 のまちある記

## 「県庁所在地の抱える課題」



市民協働で竹で制作した作品で王さん(左)と筆者(内部は小宇宙を感じさせる空間だ)

左：歴史的建造物が並ぶ新港埠頭地区(明治後期に埋立着工)の右が神戸税関、左奥が神戸生糸検査所(キーケン)

目次：「大大阪時代」がつくった基盤—大阪市	2 P～
新幹線も開通し拡大を続ける—福岡市	6 P～
廃校を地域資源に—京都・東京	13 P～
開発投資を活かしているか—神戸市	20 P～
転換していく柳都—新潟市	28 P～
新ホールは街の活性化の起爆剤?—大分市	38 P～
「あべのハルカス」から見た下町—大阪市	47 p～

## 1) 「大大阪時代」がつくった基盤—大阪市

大阪はこれまで、「水の都」「天下の台所」などと形容されてきた歴史がある。「商人の町」としてのイメージも強い。現在は都市の再開発が活発に行われているが、それとは別に大阪市と大阪府のねじれが問題になっている。大阪はこれからどういう街になろうとしているのか、大阪のまちづくりについて考察してみたい。



梅田北ヤード開発  
撮影：2015年8月21日

### 梅田北ヤードや阿倍野再開発、大阪の元気の象徴か？

大阪駅北地区（梅田北ヤード）では開発が着々と進んでいる。阿倍野地区（天王寺）ではランドマークタワーを越える日本一のビルが建設中だ。震災でダメージを受けた東日本と違って、大阪は元気そうに見える。ただし、まちづくりの目で見ると、開発手法が東京と似ている。超高層ビルをつくって、オフィスや商業の機能強化を図るのが基本だ。東京と同じ手法のまちづくりが果たして大阪の活性化にどのよう

に貢献するのか？その点は、「まったく未知」と言うしかない。超高層の複合施設は、多くの課題が山積している。ひとつは、どこの地域にもいえることだが、オフィス機能や商業機能の供給が、経済状況を鑑みて、妥当かつ適正なものになっているか十分に検証されているとはいえないことだ。最近の経済情勢から見れば、完成しても「閑古鳥」が鳴いてしまう可能性は否定できない。

もうひとつは超高層ビルの耐震性の問題だ。大阪府は橋下府政下でコスモタワー（旧大阪ワールドトレードセンタービル）を取得し、一部を咲州庁舎として活用していたが、東日本大震災をきっかけに耐震性の問題が明らかになり、全面移転を断念した。

また、超高層の複合施設は維持管理でも課題が少なくないという。建設当初は問題ないものの、15年ほど経過すると設備更新が必要になる。その際、用途が、ホテル、事務所、物販施設、スポーツクラブなどと多岐にわたるため、それぞれの業態に合わせて更新・改修工事を進めなければならない。例えば、サーバーのデータ保存や冷凍食品の保管のために、わざわざ仮設電源を導入するなど、様々な苦労があるようだ。横浜のランドマークタワーの施設担当者は「超高層の複合施設をつくるに当たっては、管理やメンテナンスを従来以上に意識していかないと厳しい」と語っていた。

### 「大大阪（だいおおさか）時代」1920年代の先見性あるまちづくり

昔の大阪のまちづくりはすばらしかった。それを物語るのが1920年代だ。

1923年9月1日、関東は震度7の激震に見舞われた。東京、横浜など、主要都市が



阿倍野再開発。高さ300mの阿倍野橋ターミナルビル（あべのハルカス）が建設されている  
撮影：2014年6月1日

仲原正治

の

まちある記

壊滅状況になった。その後、帝都復興院総裁になった後藤新平がリーダーになり、震災復興事業を進めながら、政治や経済の中心都市として首都再生を進めていった。しかし、震災のダメージは非常に大きく、復興までに十年余りの時間を要することとなった。

同じ 1923 年、新しい大阪市長に関一（せき はじめ）が就任した。関は東京高等商業学校（現・一橋大学）の教授であった 1914 年に当時の大阪市長から請われ、大阪市助役となった人物だ。大阪市長としては 7 代目に当たる。

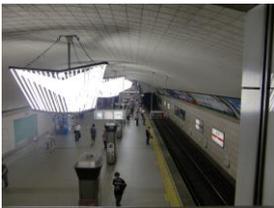
当時の大阪では、都市の骨格づくりを行政が担うとともに、紡績や鉄鋼などの基幹産業の振興、民間による商業の振興が進められた。また、1925 年には隣接の町村との合併を実施。その時点で大阪市は人口、面積とも東京市を上回り、商業の中心都市として確固たる地位を築いた。この時代を「大大阪時代」と呼んでいるが、その時代の行政の中心で活躍していたのが関市長であった。

関が進めた都市政策は、主なものだけでも御堂筋、地下鉄、大阪港、公園、大学と枚挙に暇がない。分野も幅広く、この時代の都市政策が、現在の大阪の骨格を形成している。学者である彼は、優秀な行政マンでもあった。大阪の北と南を結ぶ都市軸をつくり、そこを中心に街の発展を進めていこうと考えた。都市軸の考え方は欧米では当たり前だったが、当時の日本では珍しかった。大正時代に都市景観を考え、都市軸という先見性のあるまちづくりを進めたことは大いに評価できる。

交通の要所である大阪（梅田）駅（キタ）から、日本銀行大阪支店のある淀屋橋、大阪商人発祥の地で問屋等の集積する船場（本町）、デパートなどの集積する小売業中心の心齋橋、歓楽街の難波（ミナミ）を都市軸として捉え、キタとミナミを御堂筋で結んだ。また、建物の高さをそろえて都市の景観に配慮し、同時に地下鉄を通して交通利便性を確保した。御堂筋の完成は 1937 年。地下鉄は梅田—心齋橋間が 1933 年、その後 35 年には難波、37 年には天王寺まで延伸した。現在進められている大阪の二つのビッグプロジェクトがある梅田と阿倍野（天王寺）もこの時代に結ばれた街なのである。

当時の市街地建築物法（1919 年）では、構造上の安全性も考慮して、建物の高さを地上百尺（約 30m）までと決めていた。それもあって御堂筋に建ち並ぶ建築は高さに統一感があった。東京丸の内や大阪御堂筋のようなビジネス街では、最高限度の高さでオフィスビルをつくっていた。それが同時に軒高の統一につながり、美観の維持に役立った。

現在も、当時の名残をとどめる高さ 31m のビルはいくつか残っている。しかし、1963 年に建築基準法が改正されてからは、高さ制限も解除され、スカイラインも徐々に崩れていった。1970 年代頃まではイチョウ並木の美しさと相まって、大阪を代表する景観を形成していたが、現在は高さがまちまちのビルが林立する地区が多くなっ



地下鉄梅田駅。高い天井高を確保した豊かな空間となっている  
撮影：2011 年 8 月 20 日



日本銀行大阪支店。設計は辰野金吾。1903 年竣工  
撮影：2011 年 8 月 20 日



御堂筋。31mの高さに統一された時代の名残をとどめる街並み  
撮影：2011 年 8 月 20 日



難波近くの御堂筋。建物の高さに調和がとれていない  
撮影：2011 年 8 月 20 日

てしまった。

### 府知事の行政権限の小ささを憂い都構想掲げる？

戦後、東京の首都機能を高めるため、国は様々な施策を実行した。戦争中の 1943 年には「帝都たる東京に真の国家的性格に適應する体制を整備確立する」ため、東京に都制を敷いた。1950 年には「首都建設法」を制定し、日本の政治、経済、文化等の中心地として、世界各国と対等に交渉できる首都を目指した。1956 年には首都圏整備法を成立させ、範囲を拡大するとともに、同年に、横浜、名古屋、京都、大阪、神戸を政令指定都市（五大都市）として、県とほぼ同じレベルの権限を与えた。現在は政令指定都市の要件を緩和したこともあって政令市は 20 市（熊本市が追加）になっている。

大阪府では現在、大阪市と堺市が政令指定都市となっている。このため、府は大阪市の政策や事業についてほとんど関与することができない。このことが、府と市との間に、大きな溝を生み出している。

県と政令指定都市の関係で言えば、神奈川県も同様の悩みを抱える。横浜市（人口 369 万人）、川崎市（人口 143 万人）、相模原市（人口 72 万人）の 3 市が政令指定都市となっており、県は、人口 900 万人のうち 3 市合計の 584 万人に関する行政権限がほとんどない。総人口の約 3 分の 2 の住民への行政サービスを担当できないということになる。

大阪府（人口 886 万人）の場合は、大阪市（人口 267 万人）と堺市（84 万人）を除いた人口の約 6 割の住民にしか行政権限は及ばない。実は、こうしたところに橋下大阪府知事のジレンマがあるのではないだろうか。知事になったが、その権限の少なさに唖然としてしまい、府にもっと権限がないと行政の運営が難しいと考え、大阪都構想を掲げ、権限の強化を狙っているのではないだろうか。東京都は 23 区（特別区）制となっておりで区長等は公選となっているが、住民に対する行政権限の多くは都が握っている。都の財源、都知事の権限は絶大なのである。

### 計画性、市民性、歴史性、総合性のまちづくりの基本と権力者

まちづくりは、誰が権力をもってどのように進めるのが良いか——。昔から議論されてきているテーマのひとつである。有力な一説に、「強力な権力がなければ良い町はできない」というのがある。例えば、平城京、平安京がしかり。織田・豊臣時代も強力な権力が存在していた。具体的に街並みで言えば、碁盤の目のように整備されている京都が、その時代の骨格の名残だと言われる。

一方、ヨーロッパでは、近世の絶対君主たちが美しい壮大な都市を作ってきたとされている。パリ大改造計画は 19 世紀半ばにナポレオン 3 世の命により G・E・オス

仲原正治

の

まちある記



関一・大阪元市長の銅像。中之島公園・東洋陶磁美術館入口付近にある  
2011年8月20日



道頓堀川。「水都大阪」の象徴的河川で、賑わいづくりに活用されている  
撮影：2011年8月20日

マンの手で作られた。エトワール凱旋門広場を中心に美しい放射状の12の街路が交通の骨格を形成した機能美。そして、建物の軒高を合わせ、屋根の形態を制限する計画は、その後のまちづくりのバイブルとなっている。

こうした、まちづくりは果たして絶対的な権力の下でしか本当にできないであろうか。前述の関市長に話は戻るが、彼は大阪市長であり、ある程度の「権力」は持っていたものの“絶対君主”ではなかった。むしろ、それ以上に約20年にわたって継続的に大阪のまちづくりに携わってきたことが街の骨格形成という形で実を結んだ事例といえる。計画を権力的に進めるのではなく、反対派を説得し、地道に計画を実行してきたと言われている。

これに対し、当時の後藤新平は強大な権力を持って復興院総裁になった。しかし、彼の理想は結局、実現できなかった。こう考えると、権力の大きさだけではなく、権力の質が問われるのではないかと思う。まちづくりは、将来を見据えた計画性、市民性、歴史性、総合性を持ったものでなくてはならない。

大阪都構想を掲げる大阪では、これからも政治、経済が揺れ動いていくと思われる。新しい構想は、これからの時代には必要なことだろう。ただ、現在の構想は権限をどこが持つかという点に終始していて、街づくりの視点からの取り組み姿勢が見えてこない。権力を集中させていくことを目的化してしまうのは問題外だと言えよう。構想を立てるのであれば、まずプロセスを明らかにすることが大切だ。市民性、歴史性、総合性など、まちづくりの基本が備わった将来を見据えた計画を具体的に示し、その実現性を担保していくことが重要になる。

宮崎県の東国原前知事ではないが、理想を掲げて活動しても、もっと大きな権力を求めてわずか4年という短い期間でやめてしまっただけでは元も子もない。かえって4年間の活動自体がマイナスの面を持ってしまう恐れもある。大阪府も大阪市も、首長たちは行政の長として、しっかりと地域で根を張って、取り組んでほしい。長く居座る権力者は腐敗を生むが、短すぎる権力者では成果を上げられない。結局、人間性が豊かで見識に優れ、物事に柔軟性を持ち、自治体職員を育て、市民と一緒に行動し、一貫性のあるまちづくりを進めることができる、そういう首長が求められているように思う。

関の活躍した時代は戦争に向かっていた。市民にとって良い時代だったかどうかはわからない。しかし、まちづくりの基本を踏まえて進めてきたからこそ、その時代に、大阪という大都市の骨格ができたことは間違いがない事実なのである。

## 2) 新幹線も開通し拡大を続けるー福岡市

福岡空港に着陸するとき、すぐ下に街が広がり、こんな市街地に降りてよいのかと いつも考えさせられる。九州最大の都市福岡は、バブル経済を背景にアイランドシティ計画、シーサイドももち、キャナルシティ、川端再開発と次々とまちづくりを進め市街地を拡大してきた。また、2011年3月12日には、九州新幹線が全線開通し、福岡駅前が大きく変わった。こうした開発が進む中、いくつかのツケも重荷になっている。今回は、動いている街、福岡を取り上げる。

### 博多と福岡の違いは何？

関東人にとって、博多と福岡の違いがわからない。JRの駅は博多駅、空は福岡空港、博多っ子とは言うが、福岡っ子って言うのか？博多弁と聞くが福岡弁は聞かない。博多商人とは言うが福岡商人とは言わない。祭は博多祇園山笠であり歴史的な行事は博多の名前を付したものが多い。

歴史をひも解くと、福岡は1600年代に黒田長政が福岡城を那珂川の対岸に建設し、備前国福岡から黒田家が移封しこの地に入り、福岡という地名を付けたとのこと。そのため、武家の町が福岡で、博多は商人・町人の町として栄えてきた。

明治になり、廃藩置県によって福岡藩は福岡県になるが、1876年(明治9年)には福岡と博多は統合され、1878年に郡区町村編成法により、福岡と博多は福岡区となる。1889年に市政の施行に際して、「福岡市」か「博多市」かの大論争があったが、県令により「福岡市」になった。その際に、博多の名前を立てるために、開通する鉄道駅を「博多駅」とすることにより、両者の決着をつけた。当初の博多駅は現在の地下鉄祇園駅付近であったが、1963年に現在の位置に駅が移転した。

町で話をしても、福岡ではと言う人ほとんどいない。行政的に付けられたのが「福岡」であり、「博多」は庶民が普通に使っていた地名ではないかと思う。ただ、福岡ソフトバンクホークスとか福岡ヤフドームとか福岡県全体を意識したものは福岡と使うようだ。

### アメリカを真似たキャナルシティと中州川端

バブル経済最盛期に、何回かまちづくりの視察に福岡市にきた。当時、アメリカの開発手法が全盛期であり、日本の都市計画や商業計画の担当者やコンサルタントは、こぞってアメリカに視察に行った。そこで学んできたのが、ウォーターフロント開発と商業店舗開発だ。ボストンやサンフランシスコのウォーターフロントを参考に、ヨットハーバーと併設して商業施設を整備していった。福岡でも様々な実験的なま



キャナルシティ外観  
撮影：2011年12月3日



ビルの中を川が流れる、当時は画期的だった。  
撮影：2011年12月3日



世界的映像作家。南準白(ナムジュンパイク・故人)が当初製作した作品も展示されている。  
撮影：2011年12月3日

仲原正治

の

まちある記

ちづくりが進められてきたが、都市の規模を超えた開発が行われたのではないか当時から思っていた。

バブル経済が破綻した 1996 年、日本では今までにない都心型の総合的ショッピング・アミューズメントセンター「キャナルシティ」がオープンした。アメリカのホートンプラザを参考に、福岡地所が主体となったプロジェクトだ。建築デザインはホートンプラザをデザインしたジョン・ジャーディが担当し、高級ホテル（グランハイアット博多）や劇場を配置し、施設内に運河（キャナル）を引き、子供たちが喜ぶ噴水やパブリックアートを設置している。また、週末には、様々なパフォーマンスやイベントが行われ、家族連れが楽しく買い物ができるように工夫した。福岡地所の会長が現代アートのコレクターだったこともあり、小型のテレビモニターを数多く設置した作品は、韓国の現代アート作家、南準白（ナムジュンパイク・故人）のもので、美術界でも話題になった。（現在モニターは商業のために使われているようだ）

当時は、天神や中洲の賑わいとは裏腹に、商業の中心の一つだった川端地区や川端商店街が寂れていたが、このキャナルシティの誕生により、地下鉄中洲川端駅から川端商店街を通りキャナルシティに向かう人波が多くなった。

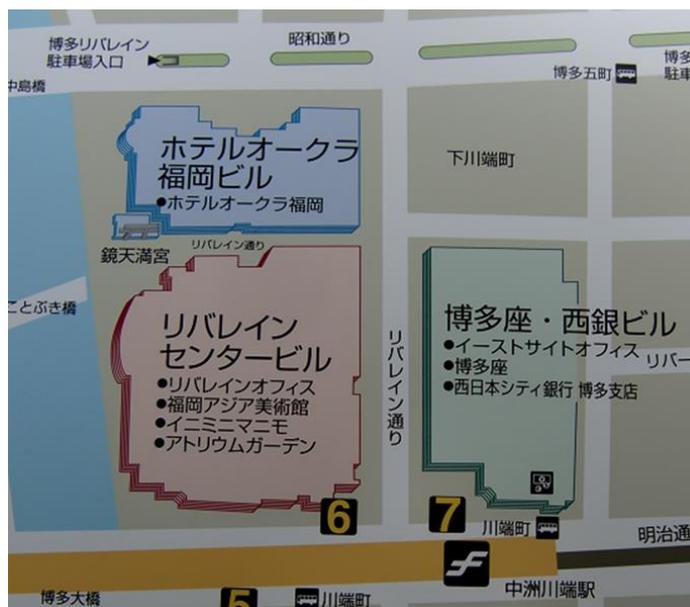


博多リバレインには福岡アジア美術館が入っている。  
撮影：2011年12月3日



博多座も入っているなど、行政主導の再開発事業だということが伺える。  
撮影：2011年12月3日

右：川端地区の再開発によって生まれたビルの配置図  
撮影：2011年12月3日



川端地区には、祇園山笠で有名な榎田神社がある。  
撮影：2011年12月3日

中洲川端地区は、1925年（大正15年）福岡で最初の百貨店「福岡玉屋」ができた場所で、当初は非常に栄えていたが、天神地区の商業開発が進むにつれ、地域のポテンシャルが落ち、福岡玉屋の経営が古かったこともあり1999年には閉店している。この地区の再生のためにキャナルシティの計画と並行して下川端の都市再開発が進められ、1999年に博多リバレインがオープンしている。この再開発には公的な資金も多く投入され、ホテルオークラ福岡や福岡アジア美術館、博多座、商業施設、

仲原正治

の

まちある記



ヒルトン福岡シーホークホテルと福岡ヤフドーム、  
撮影：2011年12月6日



集合住宅群  
撮影：2011年12月6日



福岡タワー(234m)  
撮影：2011年12月6日



上：マイケル・ブレイブスの  
デザインシーサイドももち  
の住宅  
撮影：2011年12月6日  
下：同じようなデザインのヨ  
コハマポートサイド地区の  
住宅

業務施設が入っている。しかし、商業施設は専門店が入居しているが、天神地区に比べると集客力の点では相当劣っていると思う。

久しぶりに、この両地区を歩いてみると、キャナルシティには昨年新たにキャナルシティイースト（第2キャナル）がオープンしており、ファッション系の全国チェーン店が数多く入居し、それなりの集客があるように見える。

川端商店街は、400m程度の道筋に約100軒の店舗が並んでいる。ここは、祇園山笠で有名な櫛田神社への参道で、ある意味で博多の精神的な商店街であり、キャナルシティと博多リバレインを両側に配置したことで、集客力は格段に向上したと思われる。実際に歩いてみると、平日もそれなりの人出となっているが、商店街として特徴がなく、魅力がどこにあるのかはあまりよくわからない。

## 「シーサイドももち」の今

百道海岸を埋め立て、新しい街として作られたのが、「シーサイドももち」だ。1982年に埋立てが始まり、海岸線を残し、公共施設を集中的に作っていった新しい街だ。ここには、図書館や博物館、総合病院、人工の砂浜を持つ海浜公園などの公共的な施設や福岡ヤフドームが立地している。横浜みなとみらい21地区とほぼ同時期に臨海部開発が進んできたこともあり、横浜では1989年に横浜博覧会が開催されたが、福岡では同じ89年に「アジア太平洋博覧会（よかトピア）」が開催されている。その後、企業誘致も盛んに行われ、数々の企業がこの地区に進出している。同時に住宅の整備も行われ、高層住宅も多数存在している。よく見ると、横浜駅近くのポートサイド地区の高層マンションと似ているデザインのマンションがある。両方ともマイケル・ブレイブスというアメリカの建築家がデザインしたものだが、バブル経済の名残がマンションの形状にも表れている。シーサイドももちは、企業の集積、良好な住宅地、開放された海岸線を持つ地域だが、市街地から離れていることと地下鉄駅が少し遠いこともあり、平日の昼間に訪れた時には、閑散としていた。集客を狙う地域というよりも、企業活動と住宅供給という点では成功しているのかもしれない。今年は「福岡ソフトバンクホークス」が日本シリーズを優勝したこともあり、福岡ヤフドームは相当賑わったようだ。

## ベイサイドプレイス+マリンメッセ+国際会議場はコンベンションの中心

天神から約2kmの場所に博多港がある。ここは現在、釜山への定期航路（ジェットfoilで約3時間の旅）や壱岐・対馬などの航路の出発点になっている。また、近隣は福岡のコンベンションを支える場所として整備されている。

仲原正治

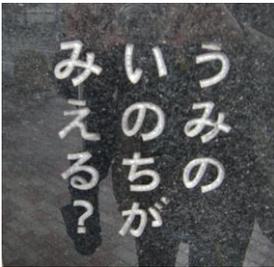
の

まちある記

右：ベイサイドプレイス周辺の案内図  
撮影：2011年12月3日



ベイサイドプレイスもオープン当初に比べて賑わいは少ない。  
撮影：2011年12月3日



近隣の公園にある言葉のアート  
撮影：2011年12月3日



マリメッセは就職説明会の行列で賑わっていた。  
撮影：2011年12月3日



福岡国際会議場では、何も開催されていなかった。  
撮影：2011年12月3日



ベイサイドプレイスは1991年にオープンしている。総合プロデューサーは表参道のフロムファーストビルを手掛けた浜野安弘氏。サンフランシスコのフィッシャーマンズワーフなどを参考にした街づくりだ。当初は賑わっており第3セクターが運営していたが経営破綻し、現在は株式会社経営になっている。この場所からは対馬などの島嶼部への船の運航が行われており、港湾施設としては有効だが、商業施設としては交通の便も悪く、魅力的な施設も乏しいため、成功しているとは言えない。このベイサイドプレイスの手前の地域には、福岡国際会議場、福岡国際センター、マリメッセ福岡などのコンベンション施設が設けられている。日本政府観光局(JNTO)によると2010年の国際会議開催数は、東京(492件)に次いで福岡が2位(216件)となっている。参加者数では東京や横浜には劣るが、アジアの窓口として、大きな役割を果たしている。施設の2010年度の稼働率は、マリメッセ福岡が81%、100万人を超える入場者、福岡国際センター78%、国際会議場65%と、横浜の国際平和会議場(パシフィコ横浜)の稼働率約68%と比較しても稼働率は高い。市の外郭団体である財団法人福岡コンベンションセンターが運営しており、市からは年間9億5千万円程度の補助金が出ており、毎年黒字になっている。アジアの表玄関であることや経済波及効果を考えると過大なものとは言えないが、単年度の黒字を出していても、10年後20年後には設備の更新などを迎えることになり、それをどうするかは課題となろう。

## 九州新幹線全線開通と博多駅

JR博多駅は関東人は使わない駅だ。ビジネスマンは福岡空港に入り、天神や中洲で用事を済ませ、また福岡空港から帰っていく。旅行者も同じことで、博多を基点に門司港や大分、長崎などに行くときには利用することもあるが、博多観光だけの

人は利用しない。だから、今まで博多駅に行くことも少なかった。2011年3月12日に九州新幹線全線開通を受けて、博多駅が大きく様変わりした。

同年3月3日にJR博多シティがオープンした。旧駅ビルの改築とJR博多駅の上空利用により、約20万㎡の延床面積を誇り、約10万㎡の営業床面積を持つJR最大級の駅ビルとなった。「アミュプラザ博多」と「博多阪急」という2施設に分かれ「アミュプラザ博多」には「東急ハンズ」やシネコン「T・ジョイ博多」を核店舗に200以上の専門店が入り、「博多阪急」は若い女性や子供をターゲットにした店舗構成を中心に、天神の岩田屋、三越、大丸の百貨店と差別化して特徴を出している。ここは、天神や中洲川端にはない特徴のある商業施設が入居していることもあり、相当たくさんの方が訪れている。新しい商業の核が博多駅に誕生したと言える。ただ、新幹線は高速道路網が発達しており、大分や熊本などには、そちらを利用する人も多く、利用頻度は未知数だ。今後、新幹線は長崎まで行くようになる計画だが、必要性についてはもっと議論が必要と思う。



博多駅(上)アミュプラザ(中)博多阪急(下)が一体となっていて大きな壁をつくっている。

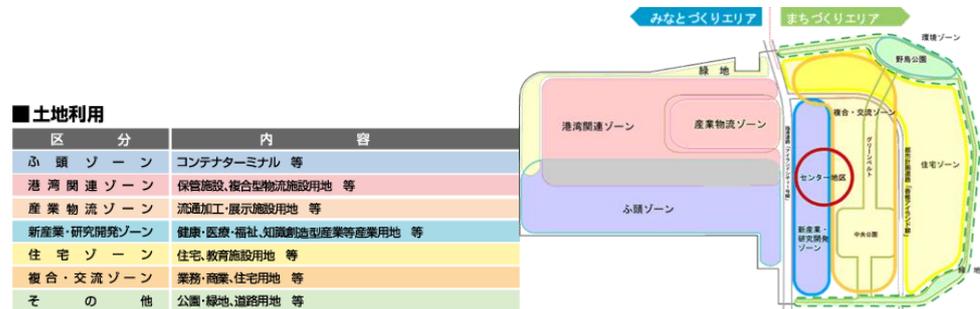
撮影：2011年12月5日

### 福岡アイランドシティ計画、これからどうなる、どうする

福岡のまちづくりで一番の厄介者は、福岡アイランドシティ計画だ。どうも役所は埋立てが好きらしい。土地を生み出せば、何か新しいことができると思っているらしい。特に、港湾関係者は、埋立事業を次々に計画している。これは、自分たちの仕事を確保するためということもある。

右：福岡アイランドシティ計画図(福岡市ホームページから)





自治体の埋立事業は、一般の予算ではなく特別会計という独立採算性が求められる会計で進められる。税金を投入するのではなく、起債を立てて事業費を捻出し、埋立地を売却して事業採算性をとる方式だ。しかし、バブル経済期のように、埋立てれば売れるという時代ではなく、当初の予定価格では売ることができず四苦八苦しているのが現状だ。当初の予定価格を相当下回る価格にして売却した場合、その穴埋めは税金に頼るしか方法がない。福岡アイランドシティは計画面積 401.3ha で、その 71%に当たる約 287ha が竣工している（平成 21 年 12 月現在）。博多港開発（株）の工区の約 97ha については、住宅や福岡ビジネス創造センター、施設一体型の小中連携学校（照葉小中学校）や病院が開設されているが、そのほかの地域の土地売却が進んでいない。2011 年 12 月に市の第三者委員会「アイランドシティ・未来フォーラム」は市長に対して、難航している土地の処分について、「定期借地方式」の導入と市費による企業誘致策（立地交付金など）の充実を答申した。しかし、現在のような経済状況下で果たして、企業の進出が図られるのだろうか。地理的にも不便な土地で交通機関の整備も不可欠であるし、関東や近畿圏でも空きオフィスが問題となっている現状の中で、人口約 150 万人の福岡市に進出する企業がそれほど多いとは思われない。もう成長の時代は終わっているということを認識し、早めに収縮させる方策を早急にとるべきだと思う。

遅すぎるかもしれないが、福岡空港はあまりにも市街地に近すぎて、いくつかの事故も起きている。空港移転などを視野に入れて計画を立てていけば、少しは変わったのかもしれない。現在、つける薬が見当たらない。

### 中州・天神+大名と集まった魅力が博多だ

博多の夜は賑やかで楽しい。中洲は飲食店も多く、屋台は相変わらず賑わっている。風俗街にも客引きも多く、活気を呈しているように見える。天神地区の商業施設も、大丸、三越、岩田屋の 3 つのデパートが競っている。

天神地区のはずれに、大名地区があるが、今はここが一番楽しく歩けるような気がする。いくつかのファッションの専門店が進出し、チェーン店でない飲食店がたくさんあり、あまり喧噪感もなく、大人的な感じの町になってきている。「紺屋 2023」

仲原正治

の

まちある記

という空きビルを活用した施設には、しゃれたイタリアンやクリエイターが集積を始めている。ここから韓国との芸術交流なども始まっている。

福岡・博多は実に魅力あふれる街だ。九州の中心地として、市街地は広いけれども、適正な規模の個性ある町が中心部に配置されている。こうした骨格のしっかりした地域を中心にコンパクトな市街地形成を図っていけば、もっと住みやすく、働きやすく、遊びたいまちになるに違いない。東京に向かってではなく、アジアにいちばん近いという立地を生かして、行政も大規模な開発という手法ではなく、地道に文化・芸術、地域の伝統などのソフトを育てることを進めていけば、福岡・博多が生きてくる。



天神地区にある百貨店  
撮影：2011年12月3日



中州の屋台はいつ来ても賑わっている。  
撮影：2011年12月3日

右：中州地区の繁華街の夜は若者、中高年で賑わっている。  
撮影：2011年12月3日



2011年は、地震・津波という前代未聞の災害で一年が過ぎていった。東北地方以外の場所では、いつものような平常な日常が戻ってきている。2012年は、復興への厳しい道が始まる年になるだろう。被災地の支援に正解も不正解もない。何かをするということが大切だ。

「世界で一番恐ろしい病気は孤独です」というマザーテレサの言葉がある。

「自分は誰かに必要とされている」

そう思える環境を被災地でも作れるように、少しでも力を注げればと思っている。

### 3) 廃校を地域資源にー京都と東京

卒業、入学の季節だ。この季節になるといくつかの学校が統廃合され、廃校も増えてくる。1960年代前後に小中学校に通っていた団塊の世代をピークに、その後は生徒数は減っている。地方を中心に廃校が増え、近年は都心にまで波及してきた。学校は地域の拠点であるとともに、人々の記憶の原点である。まちのランドマークである学校が消え、自分の通っていた場所の記憶が薄れてしまうと、地域のコミュニティも少しずつ希薄になってしまう。その面からも学校の活用、再利用は大切だ。地域を活気づけるきっかけになる。今回は、廃校の活用について、いくつかの事例を取り上げながらレポートする。



横浜市旧若葉台西中学校で行われた廃校活用実験事業「空の芸術祭」。団地のペランダや上空を使って展開するアート。作家は五十嵐靖晃氏  
撮影：2011年9月28日



ブータン王国の子供たちが制作した作品を校舎内に展示した。  
撮影：2011年9月28日



ブータン王国ジグメ・ティンレー首相と「空の芸術祭」のプロデューサーの日比野克彦氏。首相は若葉台の住民に「幸せ」について語った。  
撮影：2011年9月28日

#### 人口減少に伴う廃校の急激な増加

2012年1月、国立社会保障・人口問題研究所は日本の将来推計人口を発表した。それによると、2060年の人口は8674万人。65歳以上の人口割合は39.9%になるといふ。高齢化が進むのは、合計特殊出生率が低いことが原因だ。普通に考えると、夫婦2人で子供2人であれば、人口は安定的に推移するはずだ。しかし、2010年の出生率は1.39、今後は1.33まで低下し、最終的に1.35に落ち着くという。その結果、2060年以降も少しずつ人口は減少する。平均寿命は男性84.19歳（2010年は79.64歳）、女性90.93歳（2010年は86.39歳）となり、ますます高齢化が進行する。こうした統計を見ると、今後も生徒・学生数は少しずつ減っていくことが分かる。それに比例して学校の廃校化も進むことになる。文部科学省の調査によると、調査を開始した1992年度以降に廃校となった公立学校数は2009年度までで5796校となっている。また、2002～2009年の間に廃校になった学校のうち、建物が現存するのは3310校だ。このうち、体育施設や教育施設、文化施設、老人福祉施設、保育所など何らかの活用が図られているのが69%（2295校）を占める。残りの約30%は利用されていない。ただし、廃校になると復活が難しいので、休校という形で維持されている学校も454校に上っている。

廃校になる理由としては少子化に伴う生徒数の減少と、市町村合併による統廃合が大きな要因となっている。2009年度は526校が廃校となっており、今後は年間で400～500校の公立学校が廃校になると推計されている。

#### 京都は地元と学校の繋がりが深い

京都では廃校の活用について行政が積極的に参加し、協働事業を進めることを基本にしている。その背景には、京都の小中学校は地元とのつながりが深く、民間が勝手



祇園に近い木屋町の旧立誠  
小学校  
撮影：2011年10月29日



京都芸術センター（旧明倫小  
学校）の入り口  
撮影：2011年10月29日



京都マンガミュージアムの  
校庭でくつろぎながらマン  
ガを読むことができる。  
撮影：2009年8月22日



京都マンガミュージアムの  
内部  
撮影：2009年8月22日

に利用して収益を上げるような仕組みを善しとしない風潮がある。

幕末の混乱期の京都は、市街の焼失に加え、天皇が「東京遷都」する（東京に一時的に移る）ことに危機感を持っていた。そのため人材育成を目指して教育制度を確立しようと、町の人たちと一緒に小学校（尋常小学校）を作った。明治維新後の京都の再生策として、新たに地域自治の単位である「番組」を編成し、その地域に一つずつ、計 64 校の小学校を建てた。設立に当たって採用されたスキームは、民間からの寄付金や各世帯からの納付金で賄うという、現在では考えられないものだ。京都府からの下付金があった小学校もあるが、全部を寄付金だけで賄った学校も少なくない。番組小学校は、町衆の心意気の特徴でもあったわけだ。そこが地域コミュニティの中心となったため「わが町の学校」という意識が強く、地区住民と小学校との繋がりはとても強いものとなっている。

京都市は 1993 年に「京都市都心部小学校跡地活用審議会」を設置し、学校の統廃合に着手した。翌 94 年には「都心部における小学校跡地の活用についての基本方針」を策定。跡地活用対象校について「広域的視点」「長期的視点」「複合的視点」の三つの視点から活用するとした。今後の都心地域の整備方針を踏まえた活用をうたい、職住近接の都心再生、文化首都づくり、都市活力創造の三つを基本に据えている。事業手法としては、原則として京都市の事業として行い、国立施設の誘致、第三セクター、公有地信託制度の活用など内容に応じた事業手法の導入も検討していくとしている。

近年は、少子化の進行に伴って、中心部だけではなく、郊外部の小学校も廃校するケースが増えている。京都市は 2011 年に再び「京都市都心部小学校跡地活用審議会」を開催。事業手法について、市事業を優先するとしただけで、公益団体の事業や地域の活性化につながる民間事業も行えるように変更した。

### 番組小学校が京都国際マンガミュージアムに

番組小学校の多くは、市街地にあるため、交通の便が良い場所に建っている。上京第二十五番組小学校として 1869 年（明治 2 年）に設立された旧龍池小学校は、地下鉄東西線と烏丸線が交差する烏丸御池駅から徒歩すぐの場所にある。建物は 1929 年（昭和 4 年）に建てられたもので、1995 年に他の 4 校と統合され、閉校。その後、いろいろな団体が活用に向けた提案をしてきた。

2003 年にマンガミュージアム構想を提案したのが、京都精華大学だ。地元との様々な調整を行い、2005 年には都心部小学校跡地活用審議会が活用計画を承認した。オープンは 2006 年 11 月。構想から 3 年という短期間で開業させたのは驚異的である。関係者の努力は並大抵のものではないと思う。

スキームは、京都市との協働事業である。市は大学に 30 年間に渡って建物と敷地

仲原正治

の

まちある記



にしずかも創造舎の外観  
撮影：2012年3月17日



家庭科教室は様々な道具づくりや料理などができる便利な場所になっている。  
撮影：2012年3月17日



アニメーションのワークショップも行われている。  
撮影：2012年3月17日



にしずかも創造舎の劇場。学校の体育館を用途変更した劇場での公演風景  
(写真：飯田研紀、にしずかも創造舎提供)

を無償で貸与する。大学は建物の管理、展示、資料収集、ワークショップなどの運営を担う。開設時の初期投資は約13億円で、そのうち約7億円が文部科学省の補助金、1億円が京都市からの支援だ。京都精華大学は5億円を負担している。毎年の運営費は約3億円で、そのうち1億5000万円ほどが入場料収入である。文科省や京都市からの支援もあるが、大学は毎年1億円程度を予算化している。

この事業の中心となった京都精華大学マンガ学部の吉村和真准教授は、「マンガミュージアムを建てる計画が出たときに『なんでここでマンガなのか』という声は当然、上がった」と話す。「地元が承認するまでには紆余曲折があった。ただ、京都の風土というか特徴なのか、いったんやると決めたら世界一を目指せということになった。施設の名前に国際という冠が付き、『京都国際マンガミュージアム』となったのはそうした経緯からだ。その後も地元の協力はすごく、椅子や机をひとつひとつ拭いてくれるなど、様々な応援をしてくれる」。

官民学が一体となって動いたのが成功の一因だろう。入館者はオープン以来、2007年度に23万人、2008年度は28万人、2009、2010年度は30万人と着実に増えている。企画展の鑑賞と無数にあるマンガを手にとり読むことができることがウリだ。入館料800円(中高生300円、小学生100円)を払うと一日中過ごすこともできるし、当日であれば何回でも出入りできる。館内では、熱中して次々にマンガを取り替えて読む人、校庭で寝転びながらゆったりとマンガを読んでいる人の姿を見ることができる。筆者も何回か訪れたが、もちろん寝転んで、ゆったりとした時を過ごした。ただ、2011年度は震災により、外国人の来館者が減っているという。

また、「マンガの学術的総合研究と研究成果の社会還元」を館の目標に据えている。そのため「マンガ資料の体系的な収集と整備」や「マンガ活用モデルの研究開発」なども行っている。今後の日本の成長産業であるメディア産業についての研究拠点にもなっている。

## 豊島区は廃校活用で文化長官表彰を受けた

東京でも、多くの廃校が生じている。特に都心部では急速に子供たちが減少。インナーシティ問題が顕在化して、住民の高齢化に伴って廃校が相次いでいる。

便利な場所にあるため、廃校を利用したいという企業やNPOも少なくない。文化芸術関係での活用で有名なのは、世田谷区三宿の「世田谷ものづくり学校」、新宿の「芸能花伝舎」、「よしもとクリエイティブカレッジ」、外神田の「3331 アーツ千代田」などがある。活用については京都とは異なり、民間独自に事業採算をとる方式がほとんどだ。

豊島区は地域再生計画として「文化芸術創造都市の形成」を策定し、内閣総理大臣認定を受けている。廃校を活用し地域の活性化を促すために2003年に「協働事業

提案制度」を使って活用事業の公募を行った。これに応募したのが、「アートネットワーク・ジャパン(ANJ)」と「芸術と子供たち」の二つの団体だ。前者は東京国際芸術祭を主催していた団体で、慢性的に足りない舞台芸術の稽古場を中心とした事業を、後者は子供たちの創造的な潜在能力を引き出すために、アーティストと子供たちの出会う場を創出するという目的を持って運営してきた団体だ。こうして誕生した「にしすがも創造舎」は、地域再生のための施設なので、豊島区は無償で施設を貸し出し、管理運営費は団体が受け持つというスキームになっている。

管理運営にあたっては、相当な費用と人材が必要だが、彼らは学校を稽古場として文化芸術団体に有償で貸付けることでこれを解決している。また、体育館を劇場として利用できる仕様に変更した。日本政策投資銀行や地元の信用金庫から3000万円以上の貸付を受け、これを5年間で返還するなど、NPOとしては経営的な視点からも優れた実績を上げてきた。これも豊島区が協働事業として、用途地域の変更や銀行などへの働きかけなど、様々なバックアップをしてきた結果だ。

にしすがも創造舎は利用者も多い。カフェが併設されており、様々なワークショップが行われている。学校が文化芸術関係で使われる理由としては、教室が60m<sup>2</sup>程度の個室になっており使いやすいこと。家庭科室や理科室があり料理や実験などができること。廊下も幅が広く、トイレは男女がきちんと別れていて便器の数が多いこと。校庭があり、敷地もゆったりとしていること——などが挙げられる。こうした財産を抱える学校という場合は、美術や舞台芸術などで利用するのに最適な環境と言える。

にしすがも創造舎には日本最大の国際舞台芸術フェスティバルである「フェスティバル/トーキョー」の事務局も置かれている。日本の舞台芸術を支える施設としてゆるぎない地位を獲得している。行政とNPOが対等の立場で協力し合うことによって、大きな成果をあげたことで、豊島区は2008年度の文化庁長官表彰「文化芸術創造都市部門」を受賞した。

### **新宿区は地域よりも企業活動的要素が強い**

廃校の活用を進める上で、行政の役割をどのように考えるかは地域によって大きな違いがある。新宿区の場合は、新宿駅近辺の二つの廃校が民間活用されているが、行政と協働するシーンはほとんど見えてこない。

旧淀橋第三小学校は、社団法人芸術実演家団体協議会(芸団協)と新宿区が「新宿区における文化芸術振興に関する協定」を結び、「芸能花伝舎」として、舞台芸術系の練習場として活用している。協定では、行政や地域との協働をうたっているが、実際に訪れると、日常的な利用は劇団関係者がほとんどで、入り口付近のロビーだけが地域に開放されている。ただ、そのロビーも地域の住民が利用したり、関係者

仲原正治

の

まちある記



超高層ビルの谷間にある「芸能家伝舎」の外観  
撮影：2012年3月17日



芸能家伝舎のフロアプラン  
撮影：2012年3月17日



芸能家伝舎を訪れたのは雨の土曜日だったが、ほとんどの教室が使われていた  
撮影：2012年3月17日



よしもとクリエイティブカレッジ。看板表示が小さく、初めて訪れた場合、場所がよくわからない。  
撮影：2012年3月17日



よしもとクリエイティブカレッジの玄関  
撮影：2012年3月17日

と協働して何かをしたりしているという雰囲気は感じられない。区の財産を、家賃を徴収して利用させるという仕組みなので、借り主の立場が優先するのは当たり前だが、行政との協働が見えてこないことは、今後の課題である。舞台芸術系の稽古場不足は深刻で、こうした利用方法には賛成だ。芸団協の活動も被災地支援を含め、子供たちのプログラムなどの実践など素晴らしい活動をしている。だからこそ廃校利用についても、もっと地域連携できると素晴らしいのではないか。

活用が極端に感じたのが「よしもとクリエイティブカレッジ東京」だ。ここは旧四谷第五小学校を活用している。歌舞伎町のゴールデン街の隣に位置しており、廃校前は子供たちが繁華街を通ってきたのかと思うと少し複雑な気持ちにすらなる。訪れてまず感じたことは、企業の拠点として特化しており、地域との繋がりはまったく見えないということだ。入り口が狭く、ガードマンが立っている。玄関を入るとロビーが案内所になっているが、案内をするのはガードマンだ。会社に用事のない人は、そこから先は入れない。事前に電話予約してICカードを発行してもらわないとダメだという。



よしもとクリエイティブカレッジは新宿ゴールデン街に隣接。(撮影：2012年3月17日)

ロビーには吉本興業の興業チラシはたくさんあるが、施設の概要や廃校利用についての案内書はひとつも置かれていない。会社であるためセキュリティが厳しくなっている。むろん、カレッジなのでお笑い芸人の育成やプロデューサー育成のコースはあるが、地域連携の姿はまったく見えなかった。端的に言うと、新宿区が「吉本興業」という企業に安くて便利な事務所を提供しているということになる。

## 廃校のクリエイティブな活用で、地域が生きる

廃校利用について、行政は財政の慢性的な赤字対策と地元住民からの学校を壊して欲しくないという要望の板ばさみになっている。家賃収入と地域貢献の二兎を追う

仲原正治

の

まちある記

という自治体の姿勢がある。しかし、自治体としては本来、何が必要で、何をすべきなのか、きちんとした展望を示していく必要があるのではないかと。貸すにあたっては、活用事業についてミッションを定め、それを毎年、外部委員が評価するシステムを導入し、現在の使い方が適正なのかをチェックしていくことが重要だ。東京では、世田谷ものづくり学校や 3331 アーツ千代田など NPO 的な活動を進める団体もある。しかし、いずれも経営的には難しい問題を抱えている。活用開始時の学校の改築で初期投資に相当な財源が必要となること、施設運営に年間数千万円の資金が必要となることだ。3331 アーツ千代田は千代田区が改築費用の一部を支援しているものの、一部は借り入れて運営を始めた。



3331 アーツ千代田の外観  
撮影：2012年3月17日



3331 アーツ千代田で行われていた  
「被災地支援の掲示」  
撮影：2012年3月17日



3331 アーツ千代田の玄関(撮影：2012年3月17日)

日本政策投資銀行は2004年に初めてこうしたSOHOコンバージョン事業に融資をした。いわゆる「家守プロジェクト」である。この制度は当初、千代田区神田、秋葉原地区のビルの再生を進めるにあたり考案されたものだった。しかし今ではこれを使った廃校再生プロジェクトが出てきている。もちろん「借りたら返す」ので綿密な資金計画が必要となるのは言うまでもない。年間の運営を安定的に進めるため、入居者と年間契約での賃貸借契約を結び、経営の安定を図るケースが少なくない。廃校を活用したクリエイティブな活動は、地域の活性化だけでなく、日本の芸術文化の分野で大きな波紋を起し、国際的にも認められている。これからの地域や日本にとっての“財産”になることを考えると、国や自治体は積極的に財政支援を行う必要がある。日本中に公共のホールや劇場、美術館は無数に存在しているが、慢性的な赤字を抱え、貸館事業しかできなくなっている施設も多い。この施設にかかる予算のほんの一部を“廃校”というクリエイティブな活動施設に投資することで、地域社会が活気づくのではないかと思う。

文部科学省では「みんなの廃校」プロジェクトを発足させている。このプロジェクトは、廃校の活用方法がわからないなどの悩みを持つ自治体に対して、様々な情

仲原正治

の

まちある記

報を提供している。地域活性化を促すことが目的だ。「道の駅」が地域の物産の販売や地域情報の発信拠点となったように、廃校が街のコミュニティ・ステーションとして、地域の人たちが集い、創造的な活動を進め、地域活性化や社会の課題を解決する糸口となる、そうした場所になって欲しいと切に願っている。

## 4) 開発投資を活かしているか？—神戸市



阪神淡路大震災で被災した  
長田地区  
撮影：1995年5月15日



「復興した長田地区とシン  
ポルの鉄人28号」  
撮影：2011年1月10日



神戸市庁舎2号館（震災で6  
階が崩壊し、5階以上を撤去  
し、4階までを改修、5階を  
増築した。  
撮影：2012年4月23日



阪神淡路大震災で6階部分が崩壊した神戸市役所（撮影：1995年5月15日）

港町というと、長崎、神戸、横浜、函館、新潟と、最初に思い浮かべる都市のひとつが神戸だ。これらの都市は約150年前に開港した都市でもある。（1859年に長崎、横浜、函館、1868年神戸、1869年に新潟が開港）

神戸は、横浜のライバル都市であり、訪れるたびに、何か参考になることはないのかと探しながら歩いた。1995年の阪神淡路大震災で相当なダメージを受けた神戸だが、復興は速く、中心市街地に当時の震災の面影は見えない。今回、久しぶりに海岸沿いの神戸の街を歩いてみて、この数年は、何か新しいコトがあまり起こっていないような気がした。

### 地形がまちづくりに大きな影響を与えた。

神戸は、奈良時代に湊川の河口が「大輪田泊（おおわだとまり）」と呼ばれ、中国や朝鮮半島との交流をしていた時代から歴史に登場する。1100年代の後半には平清盛によって、宋との貿易の拠点として整備され、鎌倉時代には「兵庫津（ひょうごつ）」と呼ばれ瀬戸内海の主要港となっていた。その後、16世紀後半に震災の被害を受けたが、江戸時代には海上交通の発達とともに主要港の地位を確立していった。地形的には海岸線と平行に走る六甲山脈にはさまれ海と山が近接し平地が少ない。そのため、街は東西に発達し、南北は海と山に阻まれ、近年までは開発されていなかった。

第2次世界大戦時、神戸は何回も空襲に見舞われた。特に昭和20年3月17日、5

仲原正治

の

まちある記



神戸市庁舎1号館からのポートアイランド風景  
撮影：2009年10月9日



元町駅(1934年築)。近代建築の駅は落ち着いて素晴らしい。  
撮影：2012年4月23日



東海道本線の終点で山陽本線の起点である神戸駅(1934年築・設計柴田四郎)。  
撮影：2012年4月23日

月11日、6月5日の3回の空襲によりほぼ全域が被災した。この時の被害は、罹災者53万人余、死者約7,500人、重軽傷者17,000人余、被災戸数約14万戸となっている。

ほとんど壊滅状態になった神戸の復旧のため、1945年(昭和20年)11月1日には「神戸市復興本部」を設置し、翌年3月には「神戸市復興基本計画要綱」を定めた。この復興計画とともに「大神戸構想」を発表し、神戸を「国際的貿易都市」と定め、商工業、文化、観光都市を目指すことにした。

その後、日本は高度成長期に入り、重化学工業が順調に伸びていくが、神戸は海と山に挟まれた都市なので、工場等を受け入れる十分な土地が不足していた。そこで、1954年(昭和29年)から東西臨海工業地帯の埋立造成事業を進め、昭和40年前後に次々に埋め立てを完成させ、神戸製鋼所や三菱電機などの基幹産業を誘致し、神戸経済を盛り立てた。

六甲山脈と海に囲まれ土地が少ないというハンディを克服するため、山を削って住宅地を作り、その土を埋立てに使い、海と山の両方で土地を増やしていく事業となった。

交通網では、1872(明治5年)9月12日(新暦10月14日)に新橋―横浜間で日本最初の鉄道が開通したが、関西地方では、1874年(明治7年)に大阪―神戸間が開通する。その後1877年(明治10年)には京都まで延伸し、神戸、大阪、京都が結ばれることになる。東海道線の新橋―神戸間が全線開通したのは1889年(明治22年)7月になる。

一方、阪急電鉄は、1907年(明治40年)に設立された箕面有馬電気軌道が1910年に現在の梅田―宝塚、石橋―箕面間を開業したのが始まりだ。創業者である小林一三は沿線開発を進め、宅地開発や温泉開発(宝塚温泉)を進めたが、特筆すべきことは、宝塚唱歌隊(現在の宝塚歌劇団・2014年に100周年を迎える)を結成したことだ。鉄道の利用促進のために、この時代に住宅だけではなく、エンターテインメント事業を始めたことは、その後の東京方面での沿線開発に大きな影響を与えた。

1918年(大正7年)には社名を阪神急行電鉄に変え、1920年には十三―上筒井(当初は神戸駅と名乗っていたが、その後支線となり現在、上筒井線は廃線となっている)が開通し、その後1936年には三宮まで延伸した。

私鉄としては、阪神電気鉄道がもう一本海側を走っている。1906年(明治38年)には大阪出入橋駅(梅田駅近くにあったが現在は廃駅)から三宮の間で営業を始めており、1936年には元町まで延伸している。

こうして、三つの鉄道幹線ができたが、これはすべて、大阪と結ぶ路線となっている。

## 六甲開発と埋め立てが、神戸を大きく変えた

私が最初に神戸のまちづくりを意識したのは宮崎辰雄市長(1969年から5期20年就任・故人)が都市経営という言葉を使い、「山、海へ行く」を合言葉に土地を生み出し、それを売却することにより、神戸に企業を誘致していくという手法だった。その典型例がポートアイランドだ。1966年に第一期の埋立て(4.36ha)を着工し、1981年には北部地区の最初の埋立てが完成する。完成時に行ったのが「ポートピア'81」だ。この時代は日本経済も上り調子で、様々な企業がパビリオンを設置し、大いに賑わった。黒字を計上した「地方博覧会」の手法は、その後も新しいまちづくりを進めている地域で見習うことになり、横浜では「みなとみらい21」の街開きに際して横浜博覧会(1989年)が開催されている。

神戸では1987年にポートアイランドの二期目の埋立て事業(3.9ha)が始まり、2005年に竣工し、そこに神戸空港が開設されることになる。

第一期の埋立地は地盤改良がなされておらず、1995年の阪神淡路大震災時に液状化現象を生じさせ、中心市街地と唯一結ばれていた神戸大橋の橋脚がずれるなど、埋立ての人工島の防災上の弱点が露呈されてしまった。その後、新神戸駅方面と結ぶ地下道ができ、現在はポートアイランドへ通じる道路は2本となっている。

第一期地区には住宅だけではなく、神戸市立医療センター中央市民病院をはじめ、コンベンションセンターとそれに付随するホテルなどがある。また、ワールドの本社やユーハイム、アシックスなどの本社機能の誘致も進められてきた。神戸学院大学、神戸夙川学院大学、兵庫医療大学が進出してくるなど大学の誘致を積極的に進めている。また、イケアの進出により、町の賑わいをつくっているが、当初あったダイエーなどの撤退などもあり、商業的には成功しているとは言えない。ポートアイランドは、旅行者や市民がぶらっと遊びに来るといった街ではなく、居住する人、ビジネスで働く人が集まる地域になっているため、ポートピアホテルを訪ねたが、近くを歩いている人はほとんどいなかった。

第二期の埋立て地域は、バブル経済崩壊後の分譲だったこともあり、売却がうまく進まなかったが、神戸医療産業都市構想を立て、医療機関などの誘致を図り、理化学研究所などの研究機関の誘致に成功している。しかし、京コンピュータ駅前には、空き地が相当存在していて、今後の土地の売却がどう進むのかは疑問だ。

月曜日の午前中に神戸空港を訪ねたが、新交通ポートライナーのほとんどの乗客は、医療センター駅で降りてしまい終点の神戸空港で降りた人はわずかだった。空港にはスカイマーク機が1機のみで、その機も10時過ぎには出発し、1機もない飛行場になっていた。離発着する便のほとんどはANAかスカイマークで茨城空港行などが発着しており、果たして乗降客は確保できるのか心配になった。10時半ころに神戸空港からポートライナーに乗車したが、客は筆者一人で、医療センター駅まで一



ポートアイランド内を走る無人運転のポートライナー  
撮影：2012年4月23日



売却が進んでいない第二期の埋立地。  
撮影：2012年4月23日



医療関係者への土地売込み看板  
撮影：2012年4月23日



人が少ない神戸空港ロビー  
撮影：2012年4月23日



スカイマーク機が飛び立ち一機もなくなった飛行場  
撮影：2012年4月23日

仲原正治

の

まちある記

人も乗ってこなかった。空港近くからは関西空港までのシーシャトルバスが出ているが、こちらも有効に利用されているとは思えない。こうした地方空港は、計画時に乗降客数見込みの水増しが行われることも多く、本当に必要なのか、どこまで検証しているのか疑問だ。関西には関西空港、伊丹空港の2カ所があり、それで十分に機能しているのではないかと思う。最近作られた茨城空港や静岡空港なども、開港時から利用する飛行機が少ないという運営上の問題が生じている。赤字体質が最初から見込まれ、それを税金が埋めるという構図はいかんともしがたい。



神戸の代表的な景観メリケンパーク、対岸のハーバーランド・モザイク前からは観光船も出ている。

撮影：2011年11月20日



平日のモザイク（テラスでお茶を飲んで景観を楽しむには最適だ

撮影：2012年4月23日



赤煉瓦倉庫に並んで建つ高層住宅

撮影：2012年4月23日



閉鎖している神戸阪急（右側）と現在営業中のHa・Re（ハレ）

撮影：2012年4月23日

## ハーバーランド、メリケンパークの開発は失速している

ポートピア'81の成功に続き、神戸市は1983年にメリケンパークを着工し（87年竣工）、1985年には神戸ハーバーランド整備事業に着手する。当時の神戸は埋立て、開発、産業誘致、観光客誘致という形で、神戸経済の成長を行政が後押しをするように進められてきた。

メリケンパークは、かつてのメリケン波止場と神戸ポートタワーの建つ中突堤（1938年竣工）の間を埋め立て、神戸海洋博物館、ホテルオークラなどが進出した。このふたつと神戸メリケンパークオリエンタルホテルの風景が神戸港を代表する景観となっている。



ハーバーランドの案内図（改装中の掲示が大きい。（撮影：2012年4月23日）

神戸ハーバーランドは旧国鉄の湊川貨物駅や川崎製鉄、川崎重工業などの工場跡地の再開発で誕生した街である。対岸のメリケンパークとは異なり、民間主導で作られてきたこともあり、当初は阪急モザイクや神戸阪急、神戸西武などの百貨店が入居し、新しい複合型の商業施設としてオープンした。歴史的建造物の赤煉瓦倉庫も

仲原正治

の

まちある記

活用するなど華やかなデビューを飾ったが、元町や三宮が近くにあることもあり、商業的には苦戦を強いられてきた。特に神戸西武は開業から2年後の1994年には撤退し、その後もパソナ系列の神戸ハーバーサーカス（1996-2004年営業）が8年間で撤退し、現在は「ファミリオ」となっているが、ほとんど閉鎖状態となっている。同じビルにはニューオータニ神戸ハーバーランドも営業していたが、阪神淡路震災後の経営悪化のため2009年には撤退した。

もう一つの目玉だった「神戸阪急」も2012年3月11日に閉店した。神戸ハーバーランドダイヤニッセイビルに入居していた神戸阪急とイズミヤのある「Ha・Re（ハレ）」は、モザイクを含め、イオンモールが全体の再開発を行う予定で、2013年の春オープンに向けて、出店準備にかかっている。

現在、ハーバーランドには神戸新聞社などや川崎重工などの本社があり、業務的には機能していると思われるが、商業施設は再起を目指すことになる。赤煉瓦倉庫は隣接して高層住宅が建ってしまい、残念ながらその魅力は半減している。

今回、街を歩いてみて、モザイクは、どうにか集客があるが、物販関係の施設は、活気が見られなかった。全国で展開するイオンモールがこの街に似合うのか、今後も見守りたい。

神戸のウォーターフロント開発は、ポートアイランド、ハーバーランド、メリケンパークと次々に進め、すべてを成功させるべく官民が進めてきたが、どこも順調とは言えない状況ではないだろうか。40年以上前から投資してきたものがうまく活かされていない気がする。過去の投資を振り返り、きちんとした戦略で投資効果の見直しをしていく必要を感じた。

## 元町、三宮、北野の魅力は失われていない

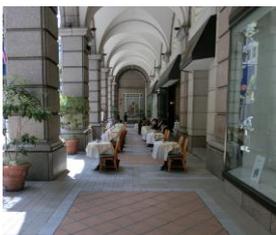
昔からの中心市街地である元町・三宮を歩いてみると、歴史的建造物が多数残っているのが印象に残る。特に大丸神戸店は阪神淡路大震災で被災したが、当時の雰囲気を取り入れて再建された新館のポルティコでお茶を飲み、のんびり過ごすには快適だ。神戸の特徴としては、ほとんどが民間による保存活用であり、飲食、物販、事務所などに使われている。戦災や震災を乗り越えて、建て替えされずに残していることに、神戸人のプライドが感じられる。

商店街も、他都市のようにチェーン店が並んでいるのではなく、神戸から全国展開している店も多く、神戸の個性を作っている一つだ。元町近くの南京街は規模としては横浜よりは小さいが、街に彩りを添えている。今回、この地区で印象に残った場所は、神戸駅から元町、三宮へ続く高架下の店舗群だ。

三宮と元町の間の高架下には、若者が中心のファッション系のお店が展開している。しかし、元町から神戸駅に向かう高架下店舗は、戦後の思いを引きずるように少し



再建された大丸神戸店（震災後の1997年築・旧居留地の雰囲気を引立てている）  
撮影：2012年4月23日



大丸のポルティコは豊かな空間になっている。  
撮影：2012年4月23日

仲原正治

の

まちある記



三井物産神戸支店(1915年築の歴史的建造物の外壁を残し、現代的な建物と共存している)

撮影：2012年4月23日



存在感のある商船三井ビル(1922年 渡辺節設計)

撮影：2012年4月23日



三宮付近の高架下商店街「ピアザkobe」には若者向けのショップが並ぶ

撮影：2012年4月23日



神戸駅付近の高架下商店街「モトコータウン」

撮影：2012年4月23日

うらぶれた施設になっており、空き店舗も多い。これも三宮と元町間の商店街が活性化しており、神戸駅付近は商業圏から遠のいているのが原因ではないだろうか。2011年秋に行われた「神戸ビエンナーレ」では、ハーバーランドの「ファミリオ」が会場となっていたが、この高架下も会場の一つとなっていた。天井高のある空間で、若干廃墟がかった空間はアーティストが展示するには最高の場所となっており、こうした活用が今後、この高架下を活性化させるのではないかと感じた。



神戸ビエンナーレで若手作家が展示会場として利用した(撮影：2011年11月20日)

元町と三宮駅の間あたりから山側が上がっていくと洋館群で有名な北野地区だ。トアロードと命名された坂道の途中で廃校(旧北野小学校・昭和6年築)を活用した「北野工房のまち」がある。ここは買って、食べて、体験して遊ぶというコンセプトで、神戸ブランドが集まっている。しかし、工房というよりも土産物という雰囲気だ。校庭は観光バスの駐車場になっており、北野地区の道の狭さを考えると観光客を引き込むには有効な利用法だ。

北野地区は伝統的建造物群保存地域に指定されていることもあり、多くの洋館が残っている。しかし、完全に観光化されており、入場料を徴収する洋館が多い。坂を上り下りして洋館を発見する楽しみは大きいですが、観光施設、レストラン、住宅が混在している。



北野地区の案内図(左)と北野工房のまち (撮影：2012年4月23日)

仲原正治

の

まちある記



焼失した旧グラシア邸現場  
撮影：2012年4月23日



北野の街の象徴的な洋館・旧  
トーマス邸(風見鶏の館)  
撮影：2012年4月23日



キーケンの大広間空間  
撮影：2012年4月23日



当時を偲ばせる生糸の検査  
のために機械類  
撮影：2009年10月9日



キーケンの事務所内  
撮影：2009年10月9日

有名な風見鶏の館(旧トーマス邸 1909年築・国指定重要文化財)も阪神淡路大震災で相当なダメージを受けたが、今は復興している。残念なのは、レストランとして活用されていた旧グラシア邸が焼失したことだ。

北野地区の個性的なまちは観光地であるが住宅地として良好な場所であり、集客と静かな住居との共存という難しい課題を抱えている。この課題を抱えながらも雰囲気損なわれないように残っていくことを願う。

### 新しい神戸の魅力づくり「旧生糸検査所(キーケン)」

神戸市の魅力づくりの戦略は「デザイン都市・神戸」だ。これまで神戸は(1)山と海に囲まれた異国情緒あふれるまちなみ(2)開港以来の開放的で自由な気風・風土からなるくらしの文化(3)ケミカルシューズ、洋菓子、真珠などに代表されるものづくりの技術などの神戸の個性を活かすために「ファッション都市(1973年)」「アーバンリゾート都市(1991年)」といった都市像を掲げてきた。こうした宣言により衣・食・住・遊の分野で新しい生活スタイルを目指してきたが、市民にとっては具体性が乏しく、見えないものとなっていた。

そこで神戸市が新たに掲げたのが「デザイン都市・神戸」である。これはファッション都市宣言以降に進めてきたことを創造都市戦略として「デザイン都市」という形で集約し、デザインによって新たな魅力を創出していく政策である。「くらしを豊かにする」「個性と魅力を活かす」「経済を活性化させる」「創造力を高める」「心を育み次世代につなぐ」の五つの視点を中心に「まちのデザイン」「くらしのデザイン」「ものづくりのデザイン」の三つに取り組むことにしている。2007年には第一回の「神戸ビエンナーレ」が開催され、2009年、2011年にも行われている。2007年には官民一体で取り組むため「デザイン都市神戸推進会議」が設立され、神戸デザインを普及させていく体制を作っている。2008年10月16日にはユネスコ創造都市ネットワークの「デザイン都市」に認定されるなど、国際的にも認められてきている。こうした行政の取り組みを知っているのは商工会議所などの経済団体くらいで市民にはあまりピンとこない。

そこで、神戸市は市民やNPOなどの団体との協働を進めるために、創造と交流の拠点「デザイン・クリエイティブセンター神戸」を今年の8月8日に開設させる。ここは、新港地区にあった旧神戸生糸検査所を国から買い取り改修したもので、約16,000㎡の大きな施設だ。このセンターではデザインやアートその他の創造的活動を通じて社会に貢献する人材の育成や集積を行い、人々の交流や連携を図ることにより、市民生活の質の向上、経済活動の活性化を図ることを目的としている。今年4月に指定管理者の公募を行い、5月下旬には管理者が決まる。

この施設は目的を明確にして国の補助金を相当額導入し取得したため、指定管理制

仲原正治

の

まちある記

度にせざるを得ない事情がある。しかし、指定管理者という枠をはめて、管理者の自由度を少なくしてしまうことによって、運営が硬直化してしまう心配がある。こうした施設は市民やNPOと協働で実験的なことを繰り返し、試行錯誤しながら進めた方が新しい発見や創造が生まれるのではないかと思う。

とはいえ、クリエイティブな施設が誕生し、若いクリエイター、デザイナーがここから育ち、未来の神戸をつくっていかこうとする姿勢は評価している。今後の神戸を活性化していく拠点になり、大阪や京都とは違った新しい魅力が神戸から発信され、この動きが、ハーバーランドやメリケン波止場に刺激を与え、そちらも新しい発想で経営されるような動きにつながっていくことを期待している。



歴史的建造物が並ぶ新港埠頭地区(明治後期に埋立着工)  
右が神戸税関、左奥が神戸生糸検査所(キーケン) 撮影：2012年4月23日

## 5) 転換していく柳都—新潟市

新潟の最初の記憶は、新潟地震（1964年6月16日、M7.5 震度5—当時は5強という表現はなかった）で、液状化現象により鉄筋コンクリート4階建ての県営住宅（川岸町アパート）が傾き、昭和大橋の橋げたが落ちた映像だ。新潟訪問は、大学1年生の時に新潟地方裁判所で「反戦自衛官小西誠」の裁判の傍聴で訪れたのが最初だ。仙台から山形を經由し新潟まで雪の中を各駅停車で向かった。新潟では、初めて出会った人の家に泊まらせていただいたが、何て温かい家族なのだろうと思ったことを今でも覚えている。見も知らない人を泊まらせ食事を提供する、その時代までは、それが不自然ではない時代だった。

学生時代に、余所の家で手作りの料理を食べさせてもらったことも多く、大人は学生の面倒をみるのが当たり前なので、今、学生やアーティストを自宅に招いて食事することが筆者の楽しみになっている。

その後、仕事で何回か訪れ、友人もでき、新潟にはたびたび行くようになった。現在「水と土の芸術祭」が開催されている新潟だが、市町村合併により拡大した新潟の姿と課題を探る。



萬代橋（1929年竣工 新潟地震の際も壊れずに、今も現役で利用されている。国の重要文化財に指定されている。）

### 新潟は水との戦いを経て、今の町ができた

新潟には信濃川と阿賀野川の二つの大きな川がある。新潟という名前から想像できるように「潟」であった場所が現在の新潟の市街地を形成している。江戸時代、新潟は長岡藩と新発田藩の二つに分かれていて、阿賀野川流域に「新発田藩沼垂（ぬったり）」、信濃川流域に「長岡藩新潟」の二つの湊があった。中世から、海の交流

仲原正治

の

まちある記

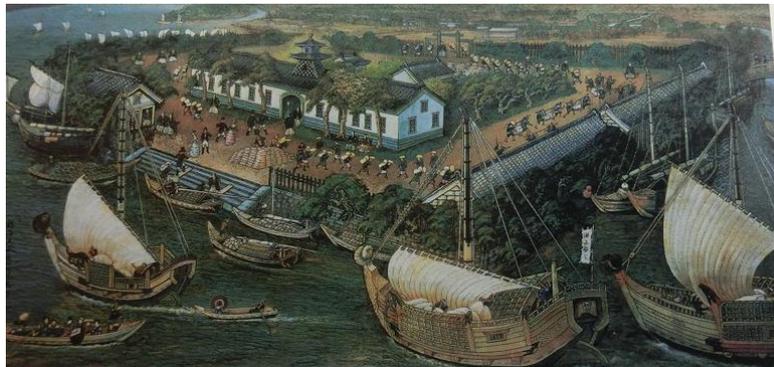
(日本海文化)が発達しており、北前船だけではなく、出雲から青森まで船は行き来し、朝鮮半島までもが文化圏だった。1631年の洪水により、沼垂湊は阿賀野川の本流が信濃川河口に合流して浅瀬となり港の機能が果たせなくなったため、新潟湊が物流の拠点として栄えてきた。



1870年に完成した新潟税関  
撮影：2012年6月14日



現在は使われなくなった旧  
栗ノ木排水機場に設置され  
た「水と土の芸術祭」磯辺行  
久作品  
撮影：2012年8月11日



明治初期の新潟税関付近の姿 (銅屋白洋画)

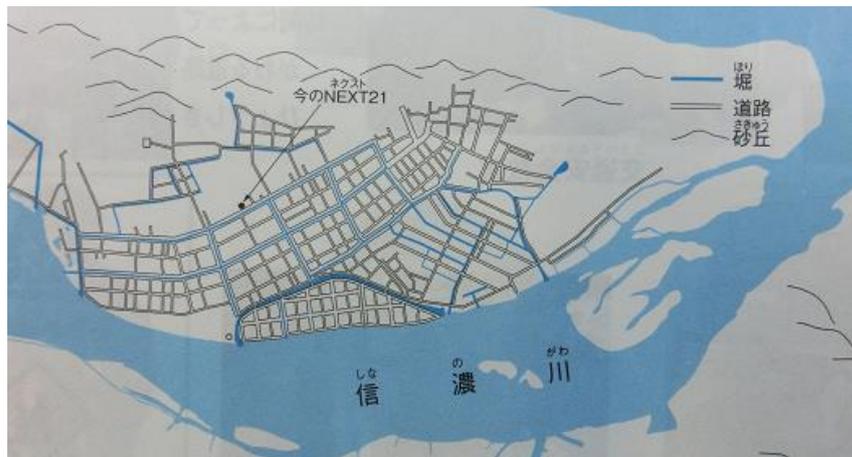
新潟市街地の道路は、河川とほぼ平行して道があり、それを結ぶ形で小路(こうじ)があるのが特徴だが、これは江戸・明暦の時代(1650年代)に、白山神社から古町通りにかけて新しい町並みを作ったためだ。信濃川と平行に街を分断していたのが寺町堀(西堀)と片原堀(東堀)で、そこを結ぶ形で小路堀が設けられ、水運が盛んだった。現在、堀は埋め立てられ道路となっており、わかりやすい町並みになっている。



小路めぐりマップ(駅前の観  
光案内所にあるが、ちらしラ  
ックには置いていないため、  
係員に頼まないと取得でき  
ない)  
撮影：2012年6月14日



堀が埋め立てられてできた  
現在の小路(こうじ)小路が  
たくさんある)  
撮影：2012年6月14日



1875年時の新潟港図 (撮影：2012年6月14日)

新潟は1858年の5ヶ国との修好通商条約締結の際、開港5港に選ばれていたが、実際には横浜に遅れること10年、1869年1月1日(旧暦明治元年11月19日)に開港することになった。1870年には関税事務を取り扱う「新潟運上所」(1872年に運上所は「税関」という名前に改められた)が完成している。開港5都市(長崎・神戸・横浜・函館・新潟)で当時の庁舎が残っているのは新潟だけである。

明治以降は、大洪水、戦争、地震などを乗り越え日本海側の中心都市として発達し

てきた。特に洪水は、1896年、97年と2度の大洪水が続き、2年続けての凶作になったため、大河津分水(河津村から日本海までの10km)の開削の世論が高まり、1909年に着工、1927年に竣工し、それ以降は信濃川下流での洪水は減少した。その後、1972年に関屋分水路の完成により、信濃川の洪水はなくなった。阿賀野川地区では、1948年に亀田郷地区の排水のために栗ノ木排水機場が完成し、排水環境が飛躍的に向上するなど、新潟では水との戦いが繰り返されていた。

第2次世界大戦時は、港湾、鉄道、豊富な電力があったこともあり工業生産の拡大があり、工業地帯が広がっていき近隣の村との合併も行われた。戦争末期にはアメリカ軍の機雷投下により港は機能を失った。市街地は広島、長崎、小倉とともに原爆目標になっていたため空爆による戦災被害は少なかった。8月6日、9日に広島・長崎に原爆が投下され、新潟にも落とされるのではという不安で、多くの市民が郊外へ避難したが、何事もなく8月15日に終戦を迎えることになった。

1955年10月1日の大火は台風22号にあおられ、焼失面積約25万㎡、被災世帯1,193世帯、被災者5,091人におよび、県庁、市役所など中心部を一夜にして焼き尽くした。火災後に「新潟市火災復興土地区画整理事業」計画がまとめられ、防火帯にふさわしい道路の骨格づくりと懸案であった東堀、西堀の埋め立てが行われ、現在の街の骨格になった。

## 日本海側の中心都市・新潟の交通体系

新潟は東京から約300km、現在は新幹線で2時間だ。新潟の鉄道整備は、日本海側だったこともあり、少し遅れた。1893年に横川―軽井沢間の開通により高崎―直江津間が開通、97年に北越鉄道が直江津―沼垂間、1904年に沼垂―新潟駅(初代)が開通し、東京から新潟まで線路は整った。(新潟駅は1958年現在地に移転)。その後、北越鉄道が国営化され1909年に高崎―新潟間が信越線と命名された。信越線は高崎から長野、直江津を経由して新潟に至る路線のため、東京からは相当な時間を要した。(信越本線は、1997年長野新幹線(北陸新幹線)の開通に際し、横川―軽井沢間が廃止され(18のアーチ橋、26本のトンネルが廃止)、軽井沢―篠ノ井間は第3セクター「しなの鉄道」が運営、JR信越本線は高崎―横川間と篠ノ井―新潟間の2区間に分断された。)

右：昔と今の新潟の鉄道比較  
撮影：2012年6月14日

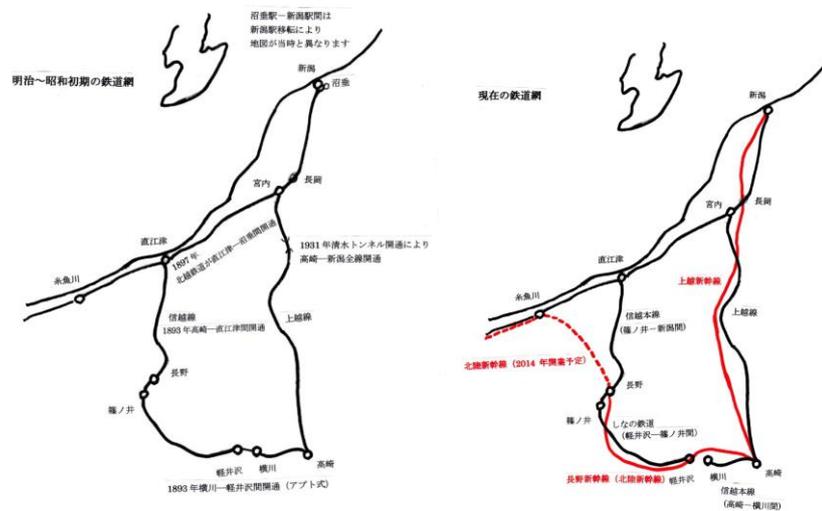


仲原正治

の

まちある記

左：明治から昭和初期の鉄道網  
右：現在の鉄道網  
(作図：仲原正治)



上越線構想は明治時代からあったが、実際には、1918年(大正7年)に着工し、1931年の清水トンネル(9,702m)の開通を待って、全線が開通することになる。清水トンネルはその後1962年の北陸トンネル(13,870m)開通まで日本一長いトンネルだった。「国境(くにざかい)の長いトンネルを抜けるとそこは雪国だった」と、川端康成の小説「雪国」の冒頭で紹介されたトンネルだ。その後、上越線の単線化を複線化するために新清水トンネル(1967年完成、13,490m)、新幹線のために大清水トンネル(だいしみずとんねる 1979年完成 22,221mで1983年の青函トンネル(53.85km)貫通まで世界一だった)が作られ、新潟と東京は近くなっていく。

街道は、江戸時代には京都から金沢を経て新潟に至る北陸道があり、新潟から青森までは羽州浜、羽州街道があった。江戸からは佐渡金山があったこともあり、中山道高崎宿から寺泊まで三国峠を通る三国街道があった。この3つの街道に沿って現在の国道が整備されており、国道8号線(京都～新潟)、国道7号線(新潟～青森)、国道17号線(日本橋～新潟)が整備されている。高速道路が最初に開通したのが北陸自動車道(新潟～長岡間1978年)で1988年に米原まで全線開通する。関越自動車道は1985年全線開通し、新潟～練馬間が約300kmで結ばれた。1997年にはいわき市と結ぶ磐越自動車道が開通し太平洋側と結ばれた。いわき市と新潟市は約220kmの距離で、東日本大震災の福島第一原子力発電所事故の際に、磐越自動車道経由で、多くの福島県民が新潟方面に避難した。

仲原正治

の

まちある記

## 近年の新潟の産業の動き



新潟市内地図  
撮影：2012年6月14日



新潟の新しいまちづくりを進める万代島(左手に佐渡汽船発着所・右手が国際コンベンション施設 朱鷺メッセ)  
撮影：2012年6月14日

新潟は米どころとして有名で、2005年の米の産出量は全国市町村中1位である。

しかし、市内総生産(2009年)のうちの第一産業が占める割合は1.3%と低く、第2次産業が17.4%、第3次産業が81.3%となっており、消費型の中心都市となっている。

近年は、「田園型政令都市」を目指し、「食と花の都—日本—豊かでにぎわいのある大農業都市—」を将来像として描き、元気の農業の担い手の育成、地域資源の活用、豊かな自然の保護、環境にやさしい農業などに取り組んでいる。新潟には先人たちの米作りの歴史、地域の素材を活かした伝統食、酒を中心とした醸造・発酵産業が根づいていることもあり、ユネスコの創造都市ネットワーク(食文化—ガストロノミー)の認定を目指している。

一方、物流では、新潟港の活性化を進めるため、中国、ロシア、韓国との日本海横断三角航路の外貿定期コンテナ航路を開拓し、釜山、天津、大連などへの定期便も就航している。

産業育成については、地場産業の活性化と企業誘致を進めるため企業立地促進法に基づく「新潟市・聖籠町企業立地促進基本計画」を策定し、「食品・バイオ関連産業」「航空機・自動車等機械・金属関連産業」「組込み・高度ITシステム関連産業」「港の活性化につながる産業」の4業種に対して支援を行うこととしている。

市は、1996年に中核市に移行し、2005年に近隣13市町村との合併により人口も80万人を超え(現在の新潟市人口約81万人、面積約726km<sup>2</sup>)、2007年に政令指定都市(現在全国で20都市)となり、県とほぼ同等の権限を持つようになった。

現在の課題のひとつは、2014年北陸新幹線開通である。北陸新幹線は、高崎、長野、糸魚川、富山を經由し金沢へ至る路線なので、ほくほく線や北陸本線の利用が相当減り、金沢方面に観光客が流れていくことが予想される。新潟は、政令指定都市として産業の育成・誘致、農業の振興など数々の問題に取り組み、日本海側第一の都市としての位置を確かにしてきた。しかし、今後は都市の個性づくりや観光振興による地域の活性化を進めていくが必要となっており、2009年から「水と土の芸術祭」を始めている。

## 日本中で町をあげての芸術祭が行われている理由

新潟では今、現代アートの展覧会「水と土の芸術祭」(会期：7月14日から12月24日)が行われている。隣接の越後妻有地区でも「大地の芸術祭」(7月29日～9月17日)が行われている。10月からは別府で「混浴温泉世界」(10月6日～12月2日)という名前の現代芸術フェスティバルが行われ、来年は瀬戸内芸術祭、名古屋トリエンナーレも開催されるなど、日本中で現代アートの展覧会が開催されている。

仲原正治

の

まちある記



越後田沢駅前に設置されている「大地の芸術祭」河口龍夫作品 建物はアトリエ・ワン+東京工業大学塚本研究室  
仲原正治 2012年8月9日



ほくほく線松代駅前の草間弥生作品—2014年の北陸新幹線開業により、ほくほく線の利用頻度が少なくなる。  
撮影：2012年8月9日

左：福島現代美術ビエンナーレ（福島空港・2012年8月11日～9月23日）に展示されたヤノベケンジ作「サン・チャイルド」は原発へのメッセージを厳しく訴えている（撮影：2012年8月12日）  
左：別府「混浴温泉世界」わくわく混浴アパートメント（撮影：2009年）

この現象は中小都市にも広まり群馬県中之条町や茨城県取手市などでも行われている。しかし、多くはこの10年以内に立ち上がったものだ。これは、地方が経済的に疲弊し、高齢者の増加や空き家の増加により町が寂れ、地域の特性が失われつつある日本の地域再生のきっかけとして進めている場合が多い。

北海道東川町の国際写真フェスティバルなどのように、1985年に「写真の町宣言」をして、それ以来、「写真の町東川賞」の授与や「写真甲子園」などを進め、今では「写真の町東川町」として、内外の写真家や愛好家が訪れる町になるような「街の個性」を文化芸術で作っていくという狙いもある。

2000年に開催した越後妻有アートトリエンナーレ「大地の芸術祭」の提起した、過疎化を逆手に取り、現代アートを通して地域文化を発掘し、地域に若者を定着させる動きや、地域の高齢者が生き生きと活動している姿が実現できたという成功例が大きい。また、大学との連携を通して、若者に地域を知ってもらうことも重要となっており、ほとんどの芸術祭に大学が関わっている。



これらの活動に対して文化庁や文化財団が助成金を出して応援している。これは、日本の地方都市や農村が東京一極集中で寂れ、それを創造的な発想と地域発のアイデアで元気にしようという気運があるからと考えられる。文化庁は2012年度に31.5億円の「地域発・文化芸術創造発信イニシャティブ」の事業助成金を用意して、こうした動きを支援している。今年度第1回目の申請では「まんが王国とっとり建国事業」ほか68件が採択を受け、事業を実施することになっている。

新潟市での芸術祭の開催は、2005年に市町村が合併し、2007年に政令指定都市になり8区の行政区になったが、他の地域のことを市民がほとんど知らない現状を改善したいという意図もあった。アートを通して地域特有の風土や歴史や建物、史跡の魅力を市民に知ってもらい、存在を知らないものに光を当てることを進めた。また、市民が一体感を持つために市民プロジェクトを多く行い、地域コミュニティの魅力を引き出すことを進めている。アーティストや外国人など、ふだんは接しない人と地域との交流によって、新しい発想を生み出し、新しい楽しみを作り出すこと

仲原正治

の

まちある記

が必要と考えた。特に、隣接する「大地の芸術祭」の成功もあり、人々が自分の地域にプライドを持ち、次の世代に引き継いでいくことを考え、2009年に第1回の「水と土の芸術祭」を「大地の芸術祭」と連動する形で進めた。第2回目今回は150にもものぼる市民プロジェクトが立ち上がっている。



メイン会場の旧水揚げ場にあるテトラポットで作られた富井大裕作品「王様と私」、左後方の建物は朱鷺メッセで右側の建物が会場  
撮影 2012年6月13日



前夜祭で挨拶する篠田新潟市長（劇場空間は神奈川大学曾我部研究室が制作）  
撮影：2012年6月13日



原口典之作品（手前のオイルプールに漁船の網などが映り込んで美しい）  
撮影：2012年8月10日



昔の建物の天井裏の上部空間に描かれた佐々木愛作品一砂糖で描かれている  
撮影：2012年8月11日

## 「水と土の芸術祭」を歩く

芸術祭のテーマは「転換点」。2011年の東日本大震災・原発事故を通して、自然とのかかわり、生き方を根底から深く問い直すことをテーマとして掲げている。

2012年7月13日（金）内覧会と前夜祭が行われた。メイン会場は国際コンベンション施設朱鷺メッセの前にある、旧水揚げ場だ。魚の水揚げが行われていた場所だが、信濃川の河口で、隣に佐渡汽船の発着所があり、「水と土の芸術祭」にふさわしい場所だ。大空間の会場にはインスタレーションが並び、2階の事務所スペースには若手の作家やアイヌ文化を継承する作家の作品が展示されている。みんなが集えるカフェスペースや劇場は曾我部昌史+神奈川大学曾我部研究室の学生が中心になって制作している。

当日のバスツアーで、旧笹川家住宅では石川直樹氏の写真「異人」を鑑賞。寺の本堂を保存のため建物で覆った角田山妙光寺では、新しい建物の天井に佐々木愛さんが描いた作品「渡り」が自然光によって浮かび上がる姿が圧巻だった。



左：市民協働で竹で制作した作品（撮影：2012年6月14日）

右：王さん（左）と筆者（内部は小宇宙を感じさせる空間だ）（撮影：2012年6月14日）

信濃川河畔にある王文志（ワン・ウェンジー）氏の作品は、2009年（第1回目）の芸術祭で制作されたが、台風で破損し途中で展示が中止になったものを、市民の強い要望で再制作された作品で、製作には多くの市民も参加した。

新潟の中心部にも北方文化新潟分館や旧斉藤家別邸などに作品が展示され、公園などにもいくつかの作品が点在していて歩いて楽しめる。郊外部の作品鑑賞には自動車が必要で、展示場所までの下調べが必要で、なかなか見つけにくい。土日祝日は「アート鑑賞半日ツアーバス」を利用する方が良い。

仲原正治

の

まちある記

## 中心市街地「古町近辺」は楽しいリズムが流れている

新潟の中心市街地はどこかと聞くと、ほとんどの人が「古町（ふるまち）」と答える。古町にはデパートが1軒だけ残っている。昔は丸大百貨店（現在イトーヨーカドー丸大新潟）、小林百貨店（現新潟三越）、新潟大和の3つのデパートがあったが、2010年に新潟大和が撤退してから、三越だけとなった。旧新潟市役所跡地に建つ再開発ビル「NEXT21」には原宿ラフォーレが入居しているが、若者は買い物には古町近辺よりも万代地域に集まるようになっていく。万代地区には伊勢丹をはじめ、LOFT、若者ファッションの専門店などが集積している。しかし、こうした全国展開している専門店はどの町に行ってもあるので、観光客にとってはあまり魅力に感じない。

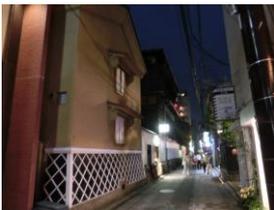
古町商店街には郷土の漫画家水島新司のマンガ「あぶさん」や「ドカベン」の主人公の銅像がたくさん並んでいる。上古町にはマンガ・アニメ専門学校もあり、マンガの町を目指した動きをしていると聞く。しかし、鳥取県境港市のように「ゲゲゲの鬼太郎」一色で街づくりを進めているわけではなく、銅像だけが設置されている感じだ。日曜日の昼頃から路上ライブ（新潟ジャズストリート）が行われ多くの観客がいたが、銅像は見向きもされていなかった。



古町商店街でのジャズストリート風景  
撮影：2012年6月15日



ドカベン・山田太郎銅像  
撮影：2012年6月14日



夜の古町界隈にはたくさんの飲食店が並んでいる  
撮影：2012年6月15日



古町近辺の市内案内図（撮影：仲原正治 2012年6月14日）

古町近辺はオフィスビルが多いこともあり、飲食店（飲み屋）がたくさんあり、酒好きの筆者としては見逃せない。古町通りを中心に西堀通り、東堀通りに飲食店がたくさん並び、それを結ぶ小路に入ると思いがけない居酒屋がある。新潟の特産は米だが、水も良いため、多くの蔵元があり、日本酒は日本一といっても良いほど良質な酒がそろっている。日曜日の夜の古町近辺を歩いたが、開いている店も多く、平

仲原正治

の

まちある記

日はもっと賑わうのではと思った。「フルマチ酒サロンマップ」を片手に小料理屋に入ったが、一見の客にも関わらず、店主が新潟の話を手際よくしてくれ、料理もお酒も堪能できた。特に夏は茶豆(枝豆)が美味しく、7月中旬から9月初旬まで楽しめるとのこと。古町芸妓もまだ健在で、いくつかの料亭では予約で芸妓を呼べる。



道路を占拠して建っているように見える人情横丁(何回か道路幅で立ち退き騒動があったと聞いた) 撮影：2012年6月15日



露店が出て、季節の野菜や魚が売られている本町通り 撮影：2012年6月14日



左：新潟古町芸妓ガイド(花代は1時間1万円、2時間が目安)

右：フルマチ酒サロンマップ表紙(100軒の飲食店が紹介されていて便利だ)

古町通りから新潟駅寄りの「本町通り」はアーケードの歩道に露店が多く並んでいる。露店は人と人の会話があって売り買いが成立するものなので、とても温かい感じがする。

本町通りの奥にある「人情横丁」(本町中央市場商店街)は面白い。昔は新津屋小路堀と呼ばれた場所で、堀の埋立てに伴い露天商が集まったのが最初で(1951年)、約160mに38店舗が並んでいて、戦後の香りがここにはある。いくつかの店を廻ったが、ある美術品店で話を聞いて硝子の器を購入したら、菓子や干支の皿もくれて、商売になるのだろうか心配になった。

### 新潟の若者の新しい顔「上古町」

今回のまち歩きで、これからの可能性を感じさせたのは「上古町(かみふるまち)」だ。古町通りを白山神社に向かって歩くと、途中から上古町になる。この町を7年ほど前に歩いたことがあるが、その時に比べて、若者の店が多くなった。ファッション系の店や飲食店、美容院など新しい店と骨董店、麴屋、老舗の和菓子店などがあり。それがうまくミックスされている。まだ空き店舗もあり、若い人が起業するには絶好の場所に思われる。むろんチェーン店はない。数年前に訪ねたときは上古町の間地点くらいに「ワタミチ」(旧渡道酒店)という写真やデッサンの教室、ワ

仲原正治

の

まちある記



上古町通り（白山神社側）  
撮影：2012年6月14日



旧「ワタミチ」（旧渡道酒店）  
は「hickry03 travelers」  
で活用されている。  
撮影：2012年6月15日



上古町通りに設置されてい  
る路上案内ボックス  
撮影：2012年6月15日

ークショップなどで利用したり貸し出したりしていたスペースがあった。現在は「hickry03 travelers」というTシャツや雑貨のデザインショップになっている。ここがいわば、上古町の若者文化の原点であり、現在も情報地図「カミフルチャンネル」（路上のボックスに入れてあり誰でも持って行ける）の編集や芸術関係の情報拠点となっている。2階にはギャラリーもある。こうした町のイメージづくりは自然に発生したのではない。2004年に地元で「上古町まちづくり推進協議会」を立ち上げ、地道に若い人を育ててきた努力が少しずつ実ってきている。

新潟を歩いてみて、地方都市の悩みは共通している。日本人の価値観や都市が画一的になり、自分の暮らす場所の魅力が見えず、若者が地元になかなか根付かないことだ。前回の仙北市や今回の上古町を歩いてみて、少しずつ地域の特性や地域で活動の道筋が見えてきている気がする。大きな政府、大きな都市、そうしたものに踊らされない個性ある都市には、そこで生き、暮らし、楽しむことは何なのかを考えて実践する人たちがいる。

新潟は柳の木が多く植えられたこともあり「柳都新潟（りゅうとにいがた）」と言われる。柳は湿潤を好み、強靱でよく張った根を持つため、川や池の周りに植えられ、水害の防止にも使われたと聞く。また倒れて埋没しても再び発芽してくる逞しい生命力があり、水と土に悩まされ、戦いながら成長してきた新潟の歴史と重なる。夏休みもそろそろ終わりだ。夏の最後には、新潟「水と土の芸術祭」妻有「大地の芸術祭」を廻り、新潟市内に泊まり、町を楽しむことをお勧めする。

## 6) **新ホールは活性化の起爆剤？**—大分市

大分とは？と尋ねると、多くの人は温泉、関サバ、むぎ焼酎などの答えが返ってくる。日本一の湯量を誇る別府温泉やブランド化した海の幸、焼酎という大分県を代表する逸品である場合が多く、大分市関連のモノやコトと答える人は少ない。大分市は、県庁所在地で経済や行政の中心で、人口では別府市の4倍近いにも関わらず認知度が低い。この大分市に地域の活性化を目指す「ホルトホール大分」が2013年7月21日にオープンすると聞いて、さっそく、まち歩きに出かけた。



府内城は1602年(慶長7年)に築城され、現在もその時代の石垣が残っている。

撮影：2013年4月22日



府内城の当時の配置図

撮影：2013年4月22日



大分駅前「大友宗麟」像

撮影：2013年4月22日



県庁前の大手公園にある「フランシスコ・ザビエル」像

撮影：2013年4月22日

(現在は大分駅前に移転している)

### 大友宗麟の時代から平成の大合併

大分は、8世紀に編纂された「豊後国風土記」に「大分郡(おおいたのこおり)」と国名が記載されている。7世紀の大和朝廷時代に豊後の国の国府が置かれているので、その時代には瀬戸内海交易の拠点として、中央との海路による交流が行われていたと推測される。

鎌倉時代に大友氏が豊後地方の守護職として赴任し、16世紀の半ば、大友氏21代の大友義鎮(宗麟)の時代に、肥後や福岡、周防まで影響力を及ぼし全盛期を築いた。義鎮は、1551年にイエズス会のフランシスコ・ザビエルと出会い、キリスト教の信仰を許可したが、その後、62年に出家し宗麟と名乗り、78年にキリスト教の洗礼を受けている。その時代に西洋式の診療所を設けるなど南蛮文化をいち早く取り入れてきた。

大友氏の衰退は早く、86年には島津家久に本拠地である府内を攻略され、秀吉に支援を要請し、九州征伐の際に持ち直した。しかし、宗麟の後を継いだ大友義統(よしむね)が失脚した後、大友氏は大分の歴史から消えていくことになる。江戸時代になると、大分は小藩に分立され、2万石の府内藩となり、その体制が明治時代まで続いた。1871年(明治4年)廃藩置県で府内県となったが、76年に大分県に編入され大分町が行政の中心地となり、1911年(明治44年)に市制が施行され大分市が誕生した。

昭和の大合併(1963年)により、鶴崎市、大南町などと合併し人口22万の大分市に発展、翌年には新産業都市の指定を受けている。97年に中核市となり、平成の大合併(2005年)で佐賀関町、津原町と合併し人口47万人の都市となっている。

### 大分市の中心市街地の現状と基本計画

大分市は1964年に新産業都市に指定され、新日鉄、東芝、昭和電工などを誘致し産業基盤を築き、人口は増大していった。70年代以降、中心市街地に長崎屋、ジャ

仲原正治

の

まちある記



トキハ本店は売場面積  
42,000㎡を超えるデパート  
撮影：2013年4月22日



大分パルコは解体中で、跡地  
には民間の大分中村病院が  
進出する予定。  
撮影：2013年4月22日



「わさだタウン」は「トキハ」  
が中心となって開発し、スー  
パーのほか、専門店、シネコ  
ンなどが入居している。  
写真：木ノ下結理  
撮影：2013年5月6日



「パークプレイス大分」(延  
床面積約10万㎡)にもスー  
パーやシネコンが入居して  
いる。  
写真：木ノ下結理  
撮影：2013年5月6日

スコ、ニチイ、ダイエー、西友(77年に大分パルコに転換)などのスーパーが進出し、地元の百貨店「トキハ」と熾烈な売上競争を繰り広げた。しかし、郊外の開発に伴い、大型店舗は次々に撤退し、2011年1月末「大分パルコ」閉店により、地元の「トキハ」以外は残っていない。

一方、郊外型のショッピングセンターは70年代に明野地区に「あけのアクロスタウン」が、2000年12月に植田(わさだ)地区に「わさだタウン」が誕生している。大分銀行ドーム(大分トリニータの本拠地)がある大分スポーツ公園周辺には、02年に福岡地所系の会社がイオングループをキーテナントとする「パークプレイス大分」をつくった。大型商業施設が郊外に立地したため、大分駅に近い中心市街地は、小売販売額の減少、空き店舗の増加、歩行者通行量の減少などに悩まされることになる。

2008年に認定された大分市の中心市街地活性化計画では、「あなたのライフスタイルを彩るまちへ」というコピーで「個の贅(ぜい)が見つかるまち“復活する商都・おおいたの拠点づくり”」を目指すこととしている。旧市街地である駅北地区と新しく区画整理する駅南地域を含めた145haを計画地域に指定し、市街地の整備改善、商業の活性化、公共交通機関の利便増進を中心に、61事業を進めることになっている。

## 大分駅周辺の開発計画

大分市の中心市街地は、1945年7月16日の空襲でほとんどが焼失し、46年(昭和21年)から戦災復興土地区画整理事業(駅北側の101.9ha)を行い、中央通りや昭和通りが幅員36mに拡幅され、ほぼ基盤状の街の骨格になっている。

現在進めている大分駅周辺総合整備事業は、その時以降の大規模な事業で、連続立体交差事業、街路事業、区画整理事業の3つの事業からなっている。

大分駅周辺は、鉄道で南北が分断されていたため、踏切での渋滞で都市の機能が停滞を招いていた。大分駅はJR豊肥本線(大分駅-熊本駅間)、久大本線(久留米駅-大分駅間)、日豊本線(小倉-大分-宮崎-鹿児島間)の3つの接続駅だが、2008年に豊肥本線、久大本線が、12年3月に日豊本線が高架化し、全線高架となり大分駅もその時に高架駅になった。

大分南土地区画整理事業は大分駅の駅南部と北部地区の駅前広場を含めた49.6haの区域で、駅前広場やシンボルロード等の公共施設整備と駅周辺の土地の有効利用、都市型住宅の整備を基本としている。この区画整理の中に「都心における新都心拠点づくり」の機能を担う「ホルトホール大分」が計画された。

また、JR九州は、延べ床面積約110,000㎡、シネコンを含む商業施設、屋上庭園、ホテル、温浴施設などを入れた複合的な商業ビルを建設する計画だ。150~200億円

仲原正治

の

まちある記

を投資し、15年春に開業を予定しており、年間200億円程度の売り上げを見込んでいる。JR九州大分支社長の津高守氏は、「人口減少で乗客減が見込まれ、近隣にいかにも多くの人が住んでもらえるかが課題で、駅前周辺にマンション建設も行っている。大分には新幹線計画はなく、在来線の速度もこれ以上早くすることは困難。博多まで2時間程度なので、定時運行を守っていくことが重要。また、日豊本線など3本の路線があるので、いかに公共交通にシフトしてもらえるかが課題。そのためにはコンパクトな街にして、鉄道利用を促進させたい。」と語っていた。駅北側には大分市が国鉄清算事業団から取得した土地もあり、これをどう活用するかも課題だ。



大分市が国鉄清算事業団から取得した駅前用地  
撮影：2013年4月22日



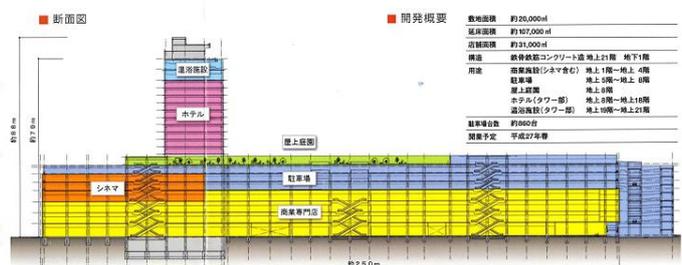
JR九州の特急列車はデザイン性にあふれ、内装も凝っていて乗るのが楽しい。2枚切符、4枚切符などを利用すると格安で廻れる  
撮影：2013年4月22日



大分南土地区画整理事業計画図(青で囲まれた地域)(大分市HPより)

**大分のまちと駅が一体となって  
都心の賑わいを創出します**

- **都心の賑わい創出**  
大分都心南北軸整備事業で整備される駅前広場等と共生し、まちと駅が一体となって大分都心の賑わい創出に貢献します。
- **ランドマーク性**  
大分の玄関口に相応しいシンボリックなタワー、南北の通り抜けを象徴する「城門」などを設け、大分のランドマークとなる施設を目指します。
- **魅力ある施設構成**  
多様な専門店や飲食店が集積する商業施設、シネマ、屋上庭園、温泉施設などを備えた魅力ある施設構成により充実した時間の過ごし方を提案します。



大分駅ビル開発概要と断面イメージ図(九州旅客鉄道株式会社発行)

**数多い文化施設**

大分市民は日頃から音楽、芸術に親しんでおり、ホールや美術館などが数多く存在する。城址公園内には、1966年開設の大分文化会館があり、2000席の大ホールと150席の小ホールを抱えている。しかし、建物の老朽化と「OASISひろば21」に主要なイベントが移り、「ホルトホール」も完成するため、2013年10月に閉館する。

仲原正治

の

まちある記



大分文化会館は2013年10月で閉館。跡地の利用は城址公園を含めて検討される。  
撮影：2013年4月22日



コンパルホールにある市民図書館はホルトホールに移転するが、分館としての機能は残る。  
撮影：2013年4月22日



「OASIS 広場 21」 iichiko 総合文化センターの1階ロビー  
撮影：2013年4月22日



旧大分県立図書館はギャラリーが設けられ、3階には磯崎新氏の建築作品の模型や資料が展示されている。  
撮影：2013年4月22日

86年にオープンした府内町のコンパルホールは定員500名のホール、市民図書館、市民プラザ、市民ギャラリー、体育館系施設、天体観測ドームなどを入れた複合施設となっている。98年オープンの「OASIS ひろば 21」には大分県立総合文化センター（命名権の譲渡で現在は「iichiko 総合文化センター」）が入っており、大ホール（グランシアタ）は約2000席、中ホール（音の泉ホール）は700席となっている。同じ建物内にNHK大分放送局、大分オアシスタワーホテル、商業施設も入居している。

77年に開館した大分県立芸術会館は田能村竹田、福田平八郎、高山辰夫、朝倉文夫などの収蔵品を持つ美術館とホールを備え、音響が優れていると専門家から評価されていたが、OASIS 広場 21 誕生後の利用者減やアスベスト問題などで、ホール部分は2012年3月に閉館している。現在、新しい美術館（設計：坂茂）を中心市街地（寿町）に建設中で、完成後は全館閉館予定である。そのほか、平和市民公園能楽堂（1990年竣工）や大分市美術館（1999年竣工、上野の森の丘陵地）がある。

県庁所在地であるため、県と市の両方の施設が作られおり、新しい施設ができると古い施設の利用率が下がるなど、施設の棲み分けが難しくなっている。また、古い施設のリニューアルよりも、新しい施設に建替える傾向が強い。例外としては、1966年に開館した県立図書館（磯崎新の代表作—日本建築学会賞）は、リニューアルされてアートプラザとして利用されている。その代りの新しい大分県立図書館は、磯崎新設計によって1995年に開館している。

## 「ホルトホール大分」の設立の概要

2013年7月20日にオープンする「ホルトホール大分」は、文化、教育・福祉・健康・産業・情報・交流の7つの機能を備えた多機能連携の複合文化交流施設で、大分新都心の核施設として位置づけられている。そのため、文化ホールのほか、図書館、まちづくり情報プラザ、産業活性化プラザ、サテライトキャンパス、障害者福祉センター、人権センター、保育所などが入居する施設となっている。

07年3月に基本構想を立て、09年には整備事業の民間事業者の公募を行い、8月に日本管財株式会社を代表とする12社構成の「大分駅南まちなみづくりグループ」（後日、SPC（特別目的会社）「大分駅南コミュニティサービス」を設立）が選定された。地元の梅林建設や前田建設等によるJVが工事を担当し11年4月に起工している。同年8月には名称とシンボルマークが公募され、市民投票を経て、12年3月に「ホルトホール大分」に決定した。『大分市の木である「ホルトノキ」は、その美しい緑と青空にたくましく伸びる姿が象徴的であるため、全国に発信することのできる施設になってほしい。』という願いを込めて命名された。

11年12月に「ホルトホール大分条例」が制定され、12年6月には公募で「ホルト





1, 200 席の大ホールは 3 層構造で、舞台と客席が近くなっている。  
撮影：2013 年 4 月 22 日



200 席の小ホールは、座席が隠されていて、エンタランスの空間と一体に利用できる。  
撮影：2013 年 4 月 22 日



3 階のテラスは、屋上公園になっていて、オープンカフェ的に使うことができる。  
撮影：2013 年 4 月 22 日



ホルトホールの裏側にある  
桜ヶ丘保育所  
撮影：2013 年 4 月 22 日

席、演劇利用を意識して客席は 3 層にしている。小ホールは 200 席でのフラットな空間でエンタランスと一体として使うことができる。1 階のエンタランスはギャラリー仕様も兼備え、完全防音のスタジオ、地元の CATV のスタジオも備えている。綱引きや卓球が盛んなこともあり体育館もある。

1 階の一部と 2 階は市民図書館 (60 万冊収蔵可能)、2 階にサテライトキャンパスと産業活性化プラザがあり、イノベーション用に 13 室が用意されている。3 階は障がい者福祉センター (社会福祉協議会運営) で、ウォーキング専用プールもある。3 階のテラスは屋外から直通階段で入れる屋上公園となっていて、隣接してカフェレストラン (イタリアン) がある。

こうした複合施設だが、心配な点は、行政の縦割りの弊害をどのように解決できるかということだ。筆者も長年、市役所に勤め、派閥主義がまかり通る行政組織の中で戦ってきたが、自分の部局のことを優先させることが多く、連携が難しいのが現状だ。ホルトホールは多ジャンルの施設が入居しているため、担当は市役所の 10 課に及ぶ。それぞれの思惑がぶつかった時に、どう調整するかが課題だ。指定管理者も 5 社による JV なので、その調整もある。これを解決するためには、市長直轄の司令塔が必要だと思うが、調整は担当部局に任されている。うまくして連携させないと行政の縦割りがそのまま噴出して、多機能の建物にした意味がない。特に産業活性化プラザはマネジメントが重要だが、適正な人材を配置して、企業や行政とどう調整するかが課題だ。

多機能施設の連携を進めるためには、全体を統括する人材、コーディネート、プロデュースする人が不可欠だが、大分市出身で、「たざわこ芸術村」で文化芸術や地域おこしで実績をあげた劇団わらび座の前代表の是永幹夫氏が選任された。彼は徹底した営業マンで、わらび座では地域に根ざしたミュージカルの制作や全国的展開を推進させるなど、文化による地域の活性化のプロである。緻密な交渉能力、大局的な思想、中央官庁や全国的なネットワーク、そして豊かな人間性を備えた方なので適任だと思う。大分市は、部局間、施設間の調整をすべて是永さんに任せる権限を与えることが必要だ。派閥主義がまかり通るようでは、多機能施設として連携を果たせなくなる。

## 中心市街地を歩きながら大分市の課題を考える

駅の北口では駅前広場工事を行っていた。駅前には国道 10 号線があり、そこを渡るには地下歩行通路を渡ることになる。中央通りの入口付近にあった「大分パルコ」は、若者のたまり場だったが、2011 年 1 月に閉店し、現在取り壊し中で、民間の病院ができることになっている。その先に、老舗デパートの「トキハ」があるが、中心市街地の衰退で苦戦を強いられている。隣に大分銀行赤レンガ館があり、この付

近にはこの建物以外の近代建築は見つからなかった。



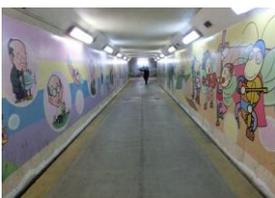
大分駅前広場の工事が行われているため、駅前には工事囲いが並び、市街地が見にくい。  
撮影：2013年4月22日



駅から国道10号線を渡る地下歩行者通路は、あまり利用したくない施設だ。  
撮影：2013年4月22日



大分銀行赤レンガ館(旧第二十三銀行本店)は東京駅と同じ辰野金吾設計で1913年完成。  
撮影：2013年4月22日



中央通りを渡る地下歩行者通路には、郷土の偉人などが漫画で描かれている。  
撮影：2013年4月22日



大分市内の案内図はユニークな円形。しかし、市内に観光案内看板は少なかった。(撮影：2013年4月22日)

中央通りの左側には大分で最も古い商店街である「ガレリア竹町」があり、高さ18mの竹町ドームに日本・ポルトガル友好450周年(1993年)のポルトガル帆船モニュメントが設置されている。交差するセントポルタ中央町ともども立派なアーケードになっているが、月曜日の買い物客の姿は少なかった。

中央通りは片側3車線で歩行者の行き来がしにくく、町を分断しているように感じる。ここにも地下歩行通路があるが、あまり利用されているようには見えない。

中心市街地活性化計画では、「ひと優先空間の再構築事業」を行うこととして、社会実験を行った後に中央通りの車線数を、現行の片側3車線から片側2車線に減らし、歩道を拡幅する。さらに、将来的には合計で3車線とする計画になっている。これに対して、商店街からは反対の声が上がっている。歩道を広くすることで、買い物客の利便性や豊かな空間がもたらす開放感は商店街にとっては歓迎することだと思うが、なぜなのだろうか。ガレリア竹町は大きな空間のあるアーケードや広場の整備をしている。こうした整備事業が商店街の振興にあまり役に立っていないのだろうか。それともプロセスの問題だろうか。上から目線で、こんな素晴らしい計画だから車道を減らそうと言うのではなく、商店街の人達が自主的に考えて、自分たちもまちづくりを提案していくことが必要だ。もっと踏み込むと、駅前の国道



現在のアーケードは1994年に完成。その時に竹町通商店街の名前をギャラリー竹町に変更した。  
撮影：2013年4月22日



片側3車線の中央通り  
撮影：2013年4月22日



府内五番街はアーケードを撤去し、1994年にオープンモールとなった。その時に若松通り商店街から府内五番街に名前を変更した。  
撮影：2013年4月22日



遊歩公園にある西洋医学発祥記念像  
撮影：2013年4月22日

を地下化して、中央通りを歩行者天国するくらい大きなビジョンを持って、車線数の変更を議論してもよいのではないかと感じさせられた。

赤レンガ館の脇道は「府内五番街」だが、ここは、以前あったアーケードを取り払ったため、開放感のある街並みになり楽しい雰囲気のお店も多い。その先の県庁前の遊歩公園には、滝廉太郎や西洋医学発祥記念像が並び、昭和通りとの交差点にはフランシスコ・ザビエル像が設置されている。今回、大分市の中心市街地を歩いて、月曜日だったこともあるが、官庁街、オフィス街というイメージを強く持った。

## 若い人が活躍するまちに

大分市は、日本経済が不況にもかかわらず、他の地方都市に比べて人口減少がない。1989年に約40万人、平成の大合併時(2005年)に前年より2万人ほど増えて約46万5千人、13年には約47万6千人と人口が伸びている。その理由は、新産業都市政策で定着した企業の模範的な工場等が多く、不況時でも縮小はあまりされず、高卒の就職率があまり落ちなかったことも一因と考えられる。

人口は微増しているが、中心市街地はピンチである。若い人はどこで遊んでいるのかを尋ねると、郊外のショッピングセンターが中心で、土日には、あまり市街地には来ないとのこと。ただ、祭りは好きなので、8月の府内戦紙(ふないぱっちんー七夕祭り)の時は、中央通りが歩行者天国になり、25万人の観客が来るという。秋の「おおいた夢色音楽祭」では、市内の様々なステージで若者が音楽を楽しんでいるし、週末には路上パフォーマンスする若者もいると聞いた。

大分市のまちづくりで難しいと思うのは、駅北の中心市街地をコンパクトに再生するのではなく、駅南に新しい街を作り、南北軸整備事業で結ぶこととしたが、南北両方の活性化を繋ぐ要素が見つけないことだ。そういう意味では「ホルトホール大分」は、南北を結び、中心市街地の活性化といかに繋ぐかということも役割の一つではないだろうか。駅北では商業床も余り始めているので、リノベーションなどによる再生で、若い人たちの活動の場を作り、ホルトホールと連携するなど必要かと思う。既存の施設を有効活用しないと、空き店舗や空きオフィスが増え、中心市街地はますます衰退していくことになる。

大分市では職員のアントレプレナー(起業家)募集を行い、「大分ブランドプロモーション戦略事業」と「アートを活かしたまちづくり」を、今年度から進めている。大分市のブランドはと聞かれると、答えることが難しい。戦国時代の太田宗麟とザビエルは歴史では知っていても、ゆかりのモノや城が残っているわけではない。別府のような観光都市ではなく、商業、産業、行政都市なので、象徴的な人物をクロージアアップしてもあまり意味がない。それよりも、県庁所在地という優位性を活か

仲原正治

の

まちある記

して、都市と都市を繋ぐ都市になった方が面白い。大分県は平松知事の時代に「一村一品運動」を進め、それは日本全国に波及し、開発途上国でも広まっている。今でもその考え方は日本中の地域のまちづくりや村おこしで重要な要素になっている。食文化が豊かだということを日本中の人知っているのも、もっと、そうしたセールスポイントをしっかりと掴んで進めた方が良い。

「アートを活かしたまちづくり」の担当者と話した時に、2015年春に県立美術館ができるので、その時までには、市街地で様々なアートの展開を進めたい。そこで「トリエンナーレ」

ではなく「トイレンナーレ」と称して、市内のトイレをきれいにし、トイレをアート化するイベントを行っていきたいと意気込みを語っていた。大分市には大分大学や日本文理大学があるが、学生の存在があまり目立たない。学生や地域の若者と協働して、中心市街地に若者の「たまり場」ができ、一帯が楽しい場所になることを期待している。

仲原正治

の

まちある記

## 7) 「あべのハルカス」から見た下界—大阪市

日本一高い「あべのハルカス」が2014年3月7日に誕生した。天王寺駅近辺は、門前町として古い歴史のある天王寺区、ハルカスのできた阿倍野区、日本三大ドヤ街のひとつ「あいりん地区」のある西成区に近接していて、どの町の断片を見てもその歴史や人々の生活を垣間見ることができる。今回、高さ300mの「あべのハルカス」の展望台から下界を眺めながら、大阪の下町のまちづくりを考える。



四天王寺の元三大師堂は平安時代に最澄により創建されたと伝えられており、大阪冬の陣で焼け、現在の建物は1623年に再建されたもので、国の重要文化財に指定されている。

撮影：2014年6月1日



あべのハルカスに隣接する「天王寺駅前駅」から出発する阪堺電気軌道は堺市の浜寺駅前までの路面電車だ。

撮影：2014年6月1日

### 天王寺なの？ 阿倍野なの？

JRと地下鉄天王寺駅の周辺は阿倍野と呼ばれている。天王寺の地名は593年に建立された四天王寺からきている。蘇我氏が戦いに勝利することを祈念して聖徳太子が四天王像を彫り、勝利後に寺を建立したと言われている。寺は1934年の室戸台風で五重塔が崩壊、45年の大阪大空襲で一部を残しほぼ焼け落ちている。その後、63年に伽藍が79年には経堂など主要部分が再建、今は天台宗から独立、和宗の総本山として太子の寺として親しまれている。一方、阿倍野の地名の由来は、古代にこの地方を支配していた「阿倍氏」からきているという説が有力だ。

関東人にとって、この二つの地名は、どこが阿倍野でどこが天王寺かがわかりにくい。現在は天王寺区と阿倍野区とに分かれ、その区界あたりに天王寺駅、近鉄阿部野橋駅があり、この周辺が中心市街地となっている。

1889年(明治22年)に大阪鉄道が湊町駅(現在のJR難波駅)から柏原駅までの路線を開通する際に途中駅として天王寺駅を作っている。1895年に大阪鉄道は、現在の大阪環状線の一部、天王寺—玉造間を開通させ、1923年(大正12年)道明寺—天王寺間を全線開通させたが、翌年、天王寺駅を「大阪阿部野橋駅」に名称を変更した。

大阪阿部野橋駅の「部」は現在の阿倍野区の「倍」と異なる漢字を使っているが、駅名が付けられた翌年の25年に大阪市に編入されたときに「阿倍野区」という表現に統一されたため、それ以前は「阿倍野」と「阿部野」が混在していた。ちなみに区内にある明治時代に建立された阿部野神社は「部」を使っている。

大阪鉄道は、1943年関西急行鉄道と合併し、翌年、南海鉄道と合併し近畿日本鉄道株式会社となった。

現在の関西本線は、関西鉄道が大阪鉄道の路線の一部を買収し、1900年に名古屋—湊町間の全線を開通させたが、1907年に鉄道国有法により国有化された。1900年に四天王寺と住吉大社への参詣客輸送のため大阪馬車鉄道が天王寺西門前—東天下茶屋間を開業させているが、それが現在も残っている阪堺電気軌道だ。現在の阪

仲原正治

の

まちある記

和線は 29 年には阪和天王寺駅が開業し、翌年、天王寺—和歌山間の全線が開通している。

大阪環状線は、大正時代に天王寺—京橋—大阪間は開通していたが、全線が開通したのは 1961 年と遅かった。

地下鉄は御堂筋線が 1933 年に梅田—心斎橋間が開通し、38 年に天王寺まで延伸している。谷町線は 1968 年に東梅田—天王寺間が開通している。天王寺・阿倍野は、明治・大正・昭和にわたっての交通網の整備で、キタ・ミナミに次ぐ繁華街として発展してきた。



簡易宿泊所が並ぶ「あիրින්地区」だが、自転車は整然と並んでいる。  
撮影：2014 年 6 月 1 日



「あիրින්地区」の簡易宿泊所は冷暖房、電気水道など込みで、3 万円後半から 4 万円台が多い。  
撮影：2014 年 6 月 1 日



昔の地名「釜ヶ崎」を使っている看板も残っている。  
撮影：2014 年 6 月 1 日

大阪市営地下鉄路線図、天王寺駅には地下鉄 2 路線、JR 3 路線が入り、近鉄南大阪線、阪堺上町線の駅も隣接している。(撮影：2014 年 6 月 1 日)

## 釜ヶ崎（あիրින්地区）は高齢化と生活保護の街に

仙台での大学生時代（1969 年）、大阪から来た同級生と話をしたときに、釜ヶ崎には多くの日雇い労働者がいて、彼らが公共事業など様々な工事の現場で働き、日本を支えていると聞いた。当時は大阪万博（1970 年）直前だった。その時に釜ヶ崎、山谷、寿町が日本の 3 大ドヤ街と知った。釜ヶ崎という地名は 1922 年に消滅したが、その後も地元では釜ヶ崎と呼んでいて、「あիրින්（愛隣）地区」という名前で呼ばれるようになったのは 1966 年からで、マスコミや行政が統一して使いだしたことによる。

高度成長期からバブル経済期までは、この地域の景気は良く、日雇い労働の人手が足りない状況だったが、バブル経済崩壊により景気の落ち込みが急に激しくなった。また、労働者の高齢化と不況が重なり仕事がなくなったため生活保護所帯が急増した。あիրින්地区では、2002 年度の生活保護は約 2,500 世帯だったが、2010 年度には約 9,500 世帯となっている。西成区の世帯・人口は約 7 万 1 千世帯、人口約 12 万人だが、2014 年 2 月の生活保護世帯は 24,840 世帯、27,534 人なので、人口に対

仲原正治

の

まちある記

する支給世帯の比率は非常に大きい。一人世帯が多いのは、あいりん地区でのひとり暮らしが多いためと推測される。あいりん地区の労働者の出身地は、大阪市 30%、大阪府下 15%、他都道府県 55%で、地方から日雇い労働に来て、高齢になった人の割合が多い。

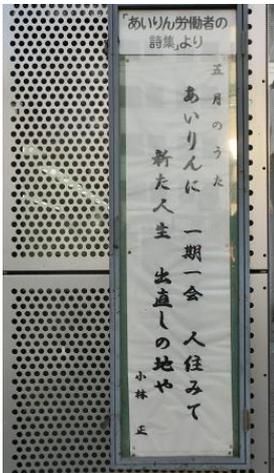
憲法 25 条では「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」と定められており、生活保護法第 1 条(目的)には「この法律は、日本国憲法第 25 条に規定する理念に基き、国が生活に困窮するすべての国民に対し、その困窮の程度に応じ、必要な保護を行い、その最低限度の生活を保障するとともに、その自立を助長することを目的とする。」とある。

そして、生活保護法 8 条 1 項(基準及び程度の原則)では「保護は、厚生労働大臣の定める基準により測定した要保護者の需要を基とし、そのうち、その者の金銭又は物品で満たすことのできない不足分を補う程度において行うものとする。」とし、同条 2 項では「前項の基準は、要保護者の年齢別、性別、世帯構成別、所在地域別その他保護の種類に応じて必要な事情を考慮した最低限の生活の需要を満たす十分なものであって、且つ、これをこえないものでなければならない。」と規定されている。

具体的な扶助は 8 種類あるが、医療扶助、生活扶助、住宅扶助が全体の 9 割以上を占めている。生活扶助では日常生活に必要な費用として食費、被服費、光熱水費、住居費などがあげられ、年齢や地域により基本額が異なるが、個人の場合で最低月 12 万円程度の支給額となる。(家族数などによって額は異なる)

また、生活保護費は住民票がなくても支給されるため、横浜市中区寿町地区では住民登録数 3,345 世帯、3,815 人(2014 年 4 月 30 日現在)だが、実際には約 5,800 世帯の生活保護受給者がいる。

こうした、定期的な収入を目当てに、生活保護世帯に対する「貧困ビジネス」が大きな問題となっている。あいりん地区や寿町に住む人たちは敷金・礼金ゼロで、いつでも出入りできる「ドヤ」と言われる簡易宿泊所(3 畳一間が一般的)に泊まることが多い。横浜寿町では生活保護の居住手当は 6 万円ほどだが 3 畳一間で水道トイレ別の部屋で一か月 6 万円の家賃は相当高い。そのため、暖かい時期は路上で生活している人もいる。また、ローンを組ませ生活保護費での返済を迫ることや戸籍の売買や外国人女性との偽装結婚など、様々な手で生活保護者を狙う「貧困ビジネス」が行われている。生活保護費の使い方は被保護者に任されるため、ギャンブルや酒に使ってしまう人もいて、高齢化と相まって生活の改善や就業などが難しい状況が続いている。また、生活保護費の不正受給なども一部にあり、様々な課題を抱えている。



西成警察署に貼られていた「あいりん労働者の詩集」からの一遍。  
撮影：2014 年 6 月 1 日

仲原正治

の

まちある記

## 昭和の町並み、飛田新地は遊郭の香りが色濃い



あべのハルカスから見た「阿倍野地区第二種市街地再開発事業」地域。現在、建物はすべて完成している。  
撮影：2014年6月1日



再開発に伴って初期に完成した「あべのマルシェ商店街」はシャッター商店街となっていた。  
撮影：2014年6月1日



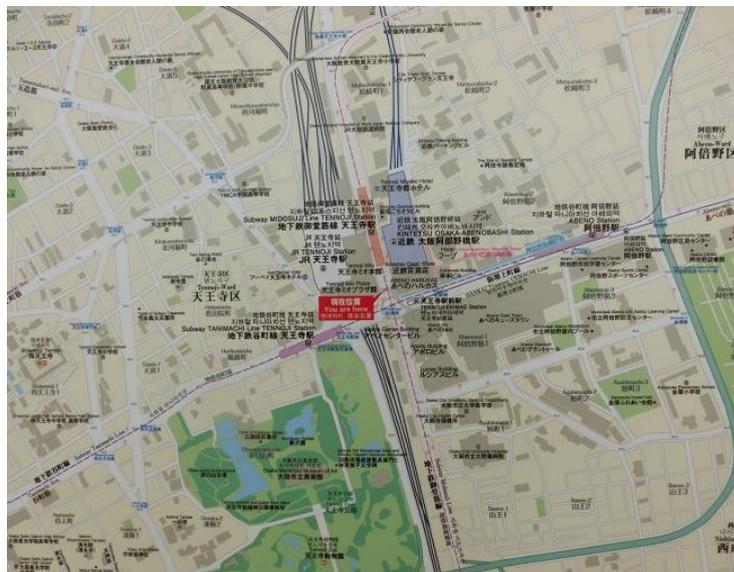
飛田新地の町並み。風景写真を撮っても注意されるので、この町での写真撮影は遠慮した方が無難だ。  
撮影：2013年2月11日

1993年ころ、阿倍野地区第二種市街地再開発事業の視察に出かけたことがある。阿倍野地区は戦前からの老朽化した木造密集地帯で道路も狭く公園等も整備されておらず、住環境や防災上の改善が求められる地域だった。1976年に事業が始まり、2015年度までの40年にわたって行われる事業だ。施行面積約28ha、権利者3,000人以上、住宅・店舗・事務所など施設建物29棟、道路17路線、公園3か所など、総事業費約4,810億円の大事業だ。

事業の一部の住宅群が完成した時に視察に訪れたが、「あべのマルシェ」という商店街の突き当りに来ると、その先に一戸建ての日本家屋が整然として並んでいた。風情のある町だなあと大阪市の職員に聞いたら「ここが有名な飛田新地です」といわれ、衝撃を受けた。

飛田新地（飛田遊郭）は大正時代にできた日本最大級の遊郭で、明治初期にできた松島遊郭と並ぶ大阪の二大遊郭だ。1958年の売春防止法の施行により、遊郭が廃止され、「飛田新地料理組合」ができ、遊郭から「料亭」という名前に変わったが、営業の内容は以前とあまり変わっていない。建物は戦後に造られた約150軒の木造建築が軒を連ねており、看板などが統一され、街並みは美しい。

筆者は10年前まで250軒以上の店が違法な売買春街だった横浜黄金町地区で、地域の環境改善や「アートの街」への活動を続けているが、当時の黄金町地区は、ほぼ100%が東南アジアなどから連れてこられた外国人女性で暴力団が支配していた。飛田新地には「じゃばゆきさん」はおらず、暴力団との付き合いはないと聞いた。



阿倍野地域の案内図。あべのハルカスの向かい側の「あべのキューズタウン」を含む旭町あたりが「阿倍野地区第二種市街地再開発事業」地域。その先の山王2・3丁目「飛田新地」地域。（撮影：2014年6月1日）

仲原正治

の

まちある記

## 民間人が発展させた街「新世界」と「通天閣」

「新世界」という名前の由来はなんだろうと、常々思っていた。新世界地域は1903年(明治36年)に第5回内国勸業博覧会が開催された場所で、その後、日露戦争時に陸軍が使用していたが、1909年に跡地の約5万坪が天王寺公園として整備され、残りの約2万8千坪が大阪土地建物に払い下げられた。

内国博覧会の時に、高さ約45mの塔(通称「大林高塔」)が大林組によって造られていて好評を博していたが、博覧会後取り壊されている。その後、払い下げ地の北側に1912年に「エッフェル塔」を模した塔を建て、そこから放射線状に道路を配置するなど、パリの街を意識したまちづくりを行った。塔は儒学者藤沢南岳により「通天閣」と名付けられ、近くにはニューヨークのコニーアイランドを模した遊園地「ルナパーク」も同時期にでき、近隣に映画館、芝居小屋、飲食店も集まり、大阪の観光地として大いに賑わった。ルナパークと通天閣の間には当時としては珍しいイタリア製の旅客用ロープウェイが設置され、ルナパーク内に置かれた幸せの神「ビリケン像」が人気を博した。「新世界」という名前は、この時代に、まったく新しい発想で街をつくったことから、記憶術の達人・和田守菊次郎が名付けたと言われている。1918年には隣接する場所に飛田遊郭、19年には新世界に大阪国技館も誕生し、一大歓楽街へと変貌していった。

通天閣にある「ビリケン」は、20世紀の初めにアメリカで誕生し、明治末期に日本に入ってきた。繊維会社の田村駒(株)が会社の福德守護の神、商売繁盛の福の神として代表的商標に「ビリケン」の名前を付けたのが始まりだ。ルナパークが1923年に閉園し、その後ビリケンは行方不明となっていたが、1979年、通天閣「通天閣ふれあい広場」を造る際に、ビリケンを復活させることになり、49年に田村駒が作っていたビリケン像が通天閣に貸出された。

初代通天閣は1943年1月に塔の直下にあった映画館大橋座から出火した火事に巻き込まれ損傷し、その後金属類回収令で鉄材供出のため解体された。45年3月13日の大阪大空襲で新世界地域は被災し、ほとんどが焼けている。

戦後47年にジャンジャン横丁は復興したが、通天閣を復活させたいと商店街や地元が資金集めに奔走し、55年に「通天閣観光株式会社」を設立、設計者を内藤多仲に、工事は奥村組により施工され、56年に高さ103mの2代目「通天閣」が完成した。

新世界には、1997年に開業した「都市型立体遊園地ーフェスティバルゲート」があった。建物の吹き抜け部分にジェットコースターをつくり、絶叫マシンなどの遊具、レストラン、物販施設、映画館もあり、人気を博した。開園当初に訪れた時に、新世界とのギャップが大きく、子供たちが何回も遊びに来るのか疑問に思っていたが、2001年にUSJ(ユニバーサルスタジオ)ができるころには遊園地は急速に失



「ジャンジャン横丁」の工事  
囲いに掲載されている第五  
回内国勸業博覧会当時の写  
真。  
撮影：2014年6月1日



初代「通天閣」にはロープウ  
ェイも設置されていた。  
撮影：2014年6月1日



戦後の2代目「通天閣」完成  
当時の町並み  
撮影：2014年6月1日



3代目「ビリケン」は2012  
年5月に新しく生まれ変わ  
り、金髪になっている。足の  
裏をなげると幸福になると  
言われている。  
撮影：2014年6月1日



建物の中にジェットコースターを配置したフェスティバルゲート（写真：こえとことばとこころの部屋（ココローム） 撮影：2007年



左側のスワールドを残して、解体されたフェスティバルゲート（工事囲いの部分）  
撮影：2014年6月1日



JR天王寺駅方向から見るあべのハルカス  
撮影：2014年6月1日



キューズモールの屋上テラスから撮影したハルカスの夜景  
撮影：2014年6月1日

速していった。不況により店舗は次々に撤退し、そこを大阪プロレスの興行場やアートNPOなどの集積、文化活動団体への貸し出しなどを行ったが、2004年に第3セクターのフェスティバルゲート株式会社は倒産し、大阪市が赤字の補てんを行うことになった。大阪市は2007年に市が維持管理費を出すことを前提にアートや福祉などを中心とした「新世界アーツパーク事業」の民間団体公募を行ったが、収益性の問題で実現困難として、全提案を反故にするなど不誠実な対応をした。その後、建物は解体され更地として競売され、2009年に「マルハングループ」が取得したが、契約で5年間のパチンコの出店制限があり、まだ更地のままとまっている。

## 高さ日本一「あべのハルカス」誕生

「あべのハルカス」の場所には、1938年に大鉄百貨店（後の近鉄百貨店阿倍野店）が開業していた。しかし、45年の空襲により罹災、戦後すぐに復旧工事を行い、46年には一部を開業し、48年には全館約16,000㎡が開業している。その後、増築を重ね1988年には約58,600㎡の大型百貨店となった。

2007年8月、近畿日本鉄道は「阿部野橋ターミナルビル整備計画」の概要を発表し、百貨店の西側を建替え、「阿部野橋ターミナルビルタワー（仮称）」を建設することとした。同年11月、大阪市は「都市再生特別地区」の都市計画決定を行い、容積率の緩和などを行った。都市再生特別地区は、都市の再生拠点として、都市再生緊急準備地域内において既存の用途地域等に基づく用途・容積率等の規制を適用除外とした上で、自由度の高い計画を定めることができる都市計画制度で、阿倍野地区では約21haが指定されている。計画は地下5階、地上59階、高さ300m、延べ床面積約21万㎡で、低層階に営業面積日本一の百貨店、中層階にオフィス、高層階にホテル、そのほかに展望台、美術館を導入し、都市機能の充実を図っている。外装デザインは竹中工務店+ペリ クラーク ペリ アーキテクトが担当している。

「ハルカス」の名称は古語の「晴るかす」からとり「晴れ晴れしい」という意味。ハルカスは敷地いっぱい建てられ、天王寺駅前のゴチャゴチャしているところにのっぽビルが建ったという印象だ。近くに天王寺公園や阿倍野地区再開発事業地の公園などがあり、災害の際に避難できる場所になっているが、建物周辺には豊かな空地を見ることができず、「防災まちづくり」という視点が欠けている気がする。また、デパート、オフィス、ホテル、美術館など複合用途にしたことで、設備点検、設備更新の問題など、用途別に利害が異なり、休館日を設定することが難しくなる。天王寺駅近辺には、ハルカスの向かいに2011年4月「あべのキューズモール」もオープンし、SHIBUYA109やユニクロなども入居するなど若者をターゲットにした商業施設ができ多くの客で賑わっている。阿部野橋駅が近鉄南大阪線の出発駅であることもあり、奈良方面からの若い客が増えていると聞いた。



通天閣周辺は昔と比べ観光客が多くなった感じた。  
撮影：2014年6月1日



ジャンジャン横丁の串揚げ屋は賑わっている。  
撮影：2014年6月1日



朝から営業している店もあり、ワンコインセットなどで朝酒が楽しめる。  
撮影：2013年2月11日



ジャンジャン横丁の将棋倶楽部は昭和を感じさせる。  
撮影：2014年6月1日



「国際劇場」は1930年に「南陽演舞場」としてオープン、1950年に映画館に用途変更。現在は洋画、成人映画3本立て営業。設計は三木楽器本店(登録有形文化財)を設計した増田清という説が有力。  
撮影：2014年6月1日



左：あべのハルカス周辺の案内図。建物が敷地いっぱいには造られていることがわかる。  
右：あべのハルカスの全館案内図。展望台（60F）にのぼるには、美術館のある16階でエレベータを乗換える。（撮影：2014年6月1日）

### 天王寺・阿倍野地区の下町を歩く

新世界に入ると、「ジャンジャン横丁」には串カツ店が多く並び、その隣には昔ながらの将棋倶楽部があり、多くの人が昼間から将棋をしている。坂田三吉の世界が残っていて、昭和の良き時代を感じさせる。昼間から酒を呑んでいる人も多く、パチンコ店などの娯楽施設も繁盛している。数年前、テレビで新世界の住民を特集していた時、妻に先立たれた60代の男性が、朝のモーニングサービスで日本酒を2合ほど呑み「さあ、これからパチンコだ」と店を出ていく姿を映していたが、自分の将来を見るようで、切ない気持ちになったことを思い出した。

通天閣は日曜日の午後だったこともあり、約30分の待ち時間で、ようやくエレベータに乗ることができた。並んでいると香港から来た観光客が写真を撮ったりするなど外国人観光客も多い。通天閣内は展望台に登るまでの道筋が土産店ばかりで、展望台にすぐ行きたくなる気持ちにさせる。展望台から見る景色はハルカスとは異なり、すぐ近くに町並みを感じられる。

新世界のはずれに、天王寺動物園の入口がある。1909年に開園した天王寺公園は、その後、博覧会などで利用されていたが、1915年に約11haが天王寺動物園として開園している。また、隣接地に大阪市立美術館があるが、敷地は住友本家とその庭園「慶沢園」があった場所で、住友家から寄贈を受け、伊藤正文、海上静一の設計で1936年に開館したものだ。

仲原正治

の

まちある記



通天閣の展望台から撮影した天王寺公園は緑豊かで、その先に「あべのハルカス」がそびえたっている。  
撮影：2014年6月1日



公園内にある大阪市立美術館には8000点以上ののぼる収蔵品がある。  
撮影：2014年6月1日



「鯛よし百番」は1918年に建てられ、遊郭として使われていた。設計・施工は不明。  
撮影：2014年6月1日



鯛よし百番での食事は予約が必要。筆者は友人と寄せ鍋を楽しんだ。  
撮影：2014年6月1日



左：天王寺公園の見取り図 右：新今宮駅付近の案内図。西成警察署のあたりが「あいりん地区」（撮影：2014年6月1日）

新世界から大阪環状線の新今宮駅を超えると、「あいりん地区」に入る。昔は道路の両側にビニールシート屋根の露店が多く並んでいたが、警察の取り締まりで現在はほとんどなくなっている。ドヤと呼ばれる宿泊場所は数多く健在だが、ドヤを新しい形態の「宿泊施設」や「ゲストハウス」に転換する新しい動きもでてきている。インターネットで知った海外のバックパッカーや日本の若者が宿泊費の安さや交通の便が良い「あいりん地区」の簡易宿泊所を利用することも多くなっている。

ここから、あべのハルカスの建物方向に歩くと「飛田新地」に入る。昭和時代の2階建ての建物が並び、各料亭の入口玄関の正面にライトに照らされた女性が座り、隣には客引きの中年女性がいて、道を歩く男性に声をかける。写真撮影は難しく、筆者が街の風景を撮ろうとしたときにも注意された。なお、大阪府ではソーブランドの営業は許可が下りず、風俗案内所も条例で禁止されている。

飛田新地の一角にある料亭「鯛よし百番」は、大正時代に遊郭として使っていた建物で、国の登録有形文化財となっている、ここで友人と食事をしたが、外に出ると、周辺はすべて風俗街。この風俗街を抜けると「阿倍野再開発地域」に入り、集合住宅、オフィスビル、商業施設などを通り抜けると天王寺駅に着く。

## あべのハルカスから下界を眺め、まちづくりを考える

あべのハルカスの展望台に登るため切符売場に向かったが、日曜日の昼過ぎで待ち時間1時間を超える盛況ぶりだ。警備の人に尋ねたら、平日も人出は同じようなもので、一日1万人近くの客があるという。入場券は大人1,500円なので、年間の収入は30億円以上が見込まれると思われる。切符購入後は建物の外廊下を歩き、2階にあるエレベータで16階まで上がり、別のエレベータに乗換える。16階には美術館とオープンテラスがある。ここでも15分ほど並ぶ。エレベータは16階（80m）から60階（288m）まで約200mの高さを45秒の速さだ。展望台からは、大阪の市街地を360度見ることができる。当日は湿気が多く、遠くは

仲原正治

の

まちある記



HARUKASU 300 (展望台) チケット売り場まで約1時間並び、16階の乗換えエレベーター前(写真)でも15分ほど待つ。  
撮影：2014年6月1日



展望台から大阪城方向を見ると、ガラス面に主な建物などの配置が掲載されている。  
撮影：2014年6月1日



288mの最上階(60F)の下の58階は、天井のない屋外広場(天空庭園)で季節が感じられる。  
撮影：2014年6月1日



文の里商店街では商店ごとのユニークなポスターが掲載されていて、見て廻るだけでも楽しい。  
撮影：2014年6月1日

霞すんでいたため、判断できなかったが、晴れた日は大阪城、ビジネスパーク、京都タワーなども見える。58階には、天井がない屋外広場やカフェがあり、ゆったりとくつろげる空間となっている。

ハルカス展望台からミナミやキタ方向を眺めると、多くの超高層ビルを見ることができる。大阪駅前では梅田地区の開発プロジェクトも進行しており、駅周辺には、阪急百貨店、阪神百貨店、大丸梅田店、JR大阪三越伊勢丹、ルクア、グランフロント大阪など、新旧入り混じって商業施設がオープンしている。また、梅田には全体で延べ床面積約15万㎡の日本一の地下街がある。ミナミにも高島屋、大丸があり、「あべのハルカス」の近鉄百貨店は、日本最大級の約10万㎡の売り場面積だ。梅田地区のいくつかの商業施設に入ったが、売り上げが伸び悩んでいる百貨店もあると聞いた。日本経済が少し上向きになっているように見えるが、人口の減少とともにオフィス需要や商業需要がどれくらいあるのか、もしかしたら共倒れ現象が起きなければならないと思うくらい、過剰ではないかを感じる。

東京も大阪も開発が積極的に進められ、若い人は職を求めて大都会に集まってくる。日本では人口は減り続け、2060年には総人口8,673万人になる予測だ。大都会に人が集まると地方都市や田舎はますます人口が減り、高齢化率が高くなる。最初に地方が疲弊し、その次は大都会で高齢化が進み、人口が減り、疲弊していくことが予測される。政府は「経済財政運営の指針」(骨太の方針)に50年後も人口1億人維持を目標に盛り込むが、現在の社会状況で果たして達成できるかは疑問だ。

東京オリンピックで、何もかも新しい施設をつくり過大な投資をしても日本経済はほんの少ししか回復せず、その後は不況が待っている。人口減が見込まれる中で、そろそろ大規模な開発をストップし、今まで使ってきた建物や土木構造物をうまく活用してコンパクトな国づくりをしていく時代ではなかろうか。

まち歩きの最後に御堂筋線昭和町の「文の里商店街」を訪れた。少し寂れた商店街だが、店がこぞって、自分の店のユニークなポスターを作って掲載していた。買い物客が減ってきた商店街で、知恵と工夫で街を楽しんでいる姿は、これからのまちづくりの基本かもしれない。

仲原正治  
の  
まちある記

## 仲原正治のまちある記―「県庁所在地の抱える課題」

著者：仲原正治

発行：2017年6月

「仲原正治のまちある記」は日経BP社「ケンプラッツ」の記事を加筆・訂正したものです。この文章及び写真（提供写真を除く）については、出典さえ明らかにしていただければ「著作権フリー」です。

仲原正治（なかはら まさはる）略歴

(株)MZarts クリエイティブ・ディレクター(陶磁器・現代アートギャラリー)

1949年東京生まれ。1974年東北大学法学部卒業。

文化芸術によるまちづくり及びクリエイティブシティ政策の専門家。

2011年4月から2015年12月まで、日経BP社の総合サイト「ケンプラッツ」に「まちある記」を連載。全国の中心市街地、東日本大震災の被災地のレポートなど、特徴あるまちづくりを紹介している。

主な著書：「横浜市創造都市事業本部 2586日の戦い」（インターネット出版）。

現在、NPO法人黄金町エリアマネジメントセンター理事、赤煉瓦ネットワーク通信員。